

斗K-23

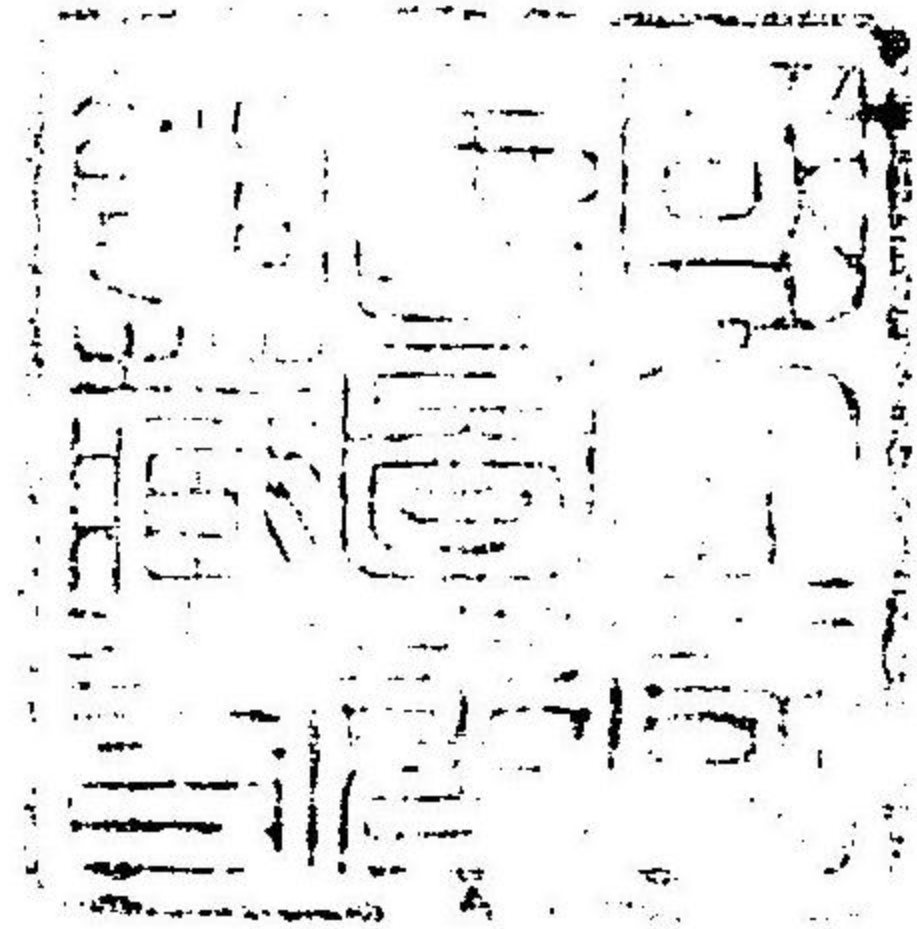
912.4

Ti 238 k7

傾城及魂香

近和門左衛門作
武藏屋葎版





337096

近松著
作全書

傾城反魂香

近松門左衛門作



素きと後と花の雪く。野山や春と盡くらん聞に北野の時鳥初音と啼し。其昔清涼殿に立
 られし駿馬の障子の繪。夜毎に出て萩の戸の萩と喰しる金岡が。筆の耽みの跡たへず傳は
 る家や畫工の名譽。狩野四郎次郎元信丹青の器量古今に長じ心ばへ能男ぶり。親の繪筆の
 彩色に生れつさなる美男なり。頃ハ文龜の彌生の空天満天神の告有て。越前の國氣比の浦
 へと旅ばより。我ハ笠さきて大小の柄にも袋させるづ。丁稚がこしの白山も去年の縁に
 へる山。山のいたゞき青々と雲に映ふ月代の。湯尾峠の孫ぢやくし。盛こぼしたる花重
 さねくし旅籠屋が。情もあつさ燗鍋の敦賀の濱にぞ着さ給ふ。四郎二郎一僕と招さ。ヤ
 雅樂の介外の弟子にも隠し此所に下りしと余の儀にあらず。近江ノ國の大名六角左京、太夫
 頼賢殿と申ハ佐々木源氏の旗頭高島の館として。系圖所領並びなき大將成るが將軍家の御意
 と受。本朝名木の松の繪本と集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木ハ。往古能因法師
 さへ跡なくなりしと詠たれば。名のみ残つて知る人なし我是と書顯ハし。名譽と得させ給

傾城反魂香

いれど天満天神と祈りし所に。武隈の松と見んと思はゞ越前國氣比の濱邊に行へしと。あられたに靈夢と蒙れ共。それの陸奥爰の越路。何と知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れし物問んとぞ呼るゝ。所の者の御用と都人にて有げに候。御尋ね有りたきとの何事にてばし御座候。御覽の如く都の者。天神の教に依て松と尋る子細有り。此所にこそ名高き松の候らめ教へて給り候へとよ。是の思ひも寄らぬと承る物のな。此北國にてお尋ね有ふならば。越前布越前綿若の實盛の生國なれば。お供の奴の罷にぬる油墨などのお尋ねも有べきに。名高き松との流石傾しき都人。先當國の名木。西行が鹽こしの松。あそふの松若が物見の松。金が崎にの義貞の腰掛松。山のと山松庭のと庭松。門にの門松酒にの濱松。肥たの肥松。捻たの捻松。わり松たい松ぬつはり松。我らが息子に岩松長松と申縁子も有。庄屋の名の松兵衛。若い時には相撲取。赤松ぶちわつた様に御座有りしが。今老松になられて力も元より下り松。腰も屈んでぬざり松くと所の人の呼候。誠にて天神の御告と有るに思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと心と懸ぬ人もなき。色よき松の候が。若左様の松にての御座なく候の實や往來も暮ふとの疑ひもなく我ら

が尋る名木よ。急いで見せて給り候し。いつも夕暮毎にの此所へ現れ出給ひ候。ヤアくはや那へ御出候。我らにお暇給り候べし。御逗留の間御用のと承り候べし。頼み申候いん。心へ申て候。高き名の松の門立ちなれて人待顔の暮ならん。町の敦賀のつけ作り。まふこそ沙のみちひなれ。誰とるも知る人にせん此廓の。松と成しも親の爲賣られ買われ北國の土けの賤の里なれど。米の育ちの上田の水損なしの太夫職。名と遠山と呼ばれしも。人に登れの戀の坂おろし歩みの道中の。花の立木の其儘にぬめり出たる如くなり。雅樂の介は申美事な者が夫ろこへ。夫くといへば四郎二郎ヤアなど。松が見へたの現れたる。寫し留んとふつと立ち女郎にはたと行當り。是の扱松のと思ふてはまつた。眞の松と尋て見ん丁稚こいと行違ふ袖と扣へて是申。此遠國の我々と京の廓の松様達と。比べさんすが不覺の至り。併不粹なお方にの松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立ず桑の木共覆共。こなさわに似合ふたわはふの木共見さんせと。無駄言なしの云ひ捨の田舎米とて笑ひれず。オ、御機嫌そこねし御尤。實くと松との木夫さま我等のわるふ心へて不調法な御挨拶。眞平くとお詫と是の御縁にお知人に成りましたし。下拙との狩野の四郎二郎元價と

申わづの繪書。去御方より武隈の松の圖と仕つれとの仰。すなはち天満天神の夢想に任せ。此所にて名有る松と尋ねしと。太夫さまとの取ちがへ是のふも有ふと。御了簡ついでにお交際もあまたなり。願のなふ便りも有らば。御世話頼み奉ると思ひ入てを語らる。女郎はつと顔と眺め。扱の狩野、四郎二郎元信様との御身の上。耻とつゝむも時に寄る何と秘さんわしとい。土佐、將監光信が娘なるが。父の一とせ勅勘うけ今浪人の愛渡世此身に沈む申さず共推して泣ひて下さんせ。扱武隈の松の圖の土佐の家の秘傳の繪本。漏すとい叶いぬ共。夕不思議や天神様の夢の告。狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松と傳授せよ父が出世の種ならんと。見たのまざくまさ夢と。語りもあへぬに四郎二郎。感心感涙肝にそみ。天と禮し地と拜し。懷中の繪筆繪絹とひろげ。遊ばせ御傳授頼むと悦びける。いにも傳へ申さんが。親の免しもなき中に筆取とい如何なり。何とせん實に思ひ付たり。あの御供の人の立姿と松の立木になぞらへ。笠と枝葉の笠となしこゝにて學び見せ申さん。それにて寫し留給へ是そな奴様爰へござんせ履ひまじよ。ないくく手ふる頭ふる年ふる松の。松根によつて腰つきも。千年の線寫せし作意なりけり。先哥人

の見たてに。一本松と二本共三木とつらねし言の葉の。それの老木の松が枝なれど寫す若木の。奴のくく。此の膝のふし松のふし。前へ地摺の下枝にぬつと出せし片足の。慮外千万千貫枝。筆捨枝や久れたの天津乙女のうたくま枝や。腰掛枝の三がい松。月にさらぬ枝々の。いれ小枝の松のげと。沖こく船の帆の波の見へて。さぞ腕に毒福の枝。とさむる手に不老の枝たれて雪見のひらへの枝。是々これく。すつと伸たるながしの枝。松の非情のものだにも。傳へし心の色いなど宛ら青々條々として。松の生木のいさく。と若やぎ立る其風情。狩野の一點違ひなく書つらねたる筆勢。何れと寫繪何れと立枝粉ひつべうぞ見へにける。元信家の幸甚たり早速歸り本懐とげ。此報恩に御身の上父御のとも請取申。万のお禮の本國よりと立歸ると是申。神の告に任せしらの恩に懸す末のけて。情と思召すならば。必外に内儀様持てばし下んすな。奴殿頼みます何か扱く。天神様より太夫様追付お二人連理の松。中に立たる此松の島盛持ての取結び千年万年万々年。とち付ひつ付松脂の離れぬ中とぞ壽さし。されば江州高島の館左京、太夫頼賢卿。參勤の上落有。執權不破入道道犬同嫡子不破伴左衛門宗末國と預る留守居なり。御家の繪書長谷部の

雲谷 速しく。入道親子が前に手とつらね。近頃過言に候へ共。某との雪舟のてきでんとして代々の御扶持人。此高島のお館にて。繪筆と取て誰人の拙者が上に付申さん。然るに此度狩野とやらん申二才。武隈の松と書しとて過分の恩賞と下され。古參と踏付御前にはびこり。剩今日、奥方へ召され姫君様より。お料理と下さるゝと承る。殿様の御留守誰が免しての推參御家老の仰一國に違背申者なし。さつとお仕置然るべしとぞ支へける。道犬領さつゝと寄れ雲谷。惣じて此四郎二郎めり。相役名古屋山三が取持にて召出された。山三の元來お小姓立。前髪の酒林で殿と酔いせし男傾城。口ばしの黄な小雀が家老並につらなり。威とふるふ其山三めと甲にきて。のさばりまゐる四郎二郎。我々親子が白眼どもと共思ひぬ奇怪さ。其方とても同前たり。又との姫君銀杏の前。御愛子なれ共脇腹へ御臺所と憚り給ひ。田上郡七百町の御朱印と付られ。京都御有徳の町人の由緒有る御家中へも。下されんとの御内意故某嫁に申請け。此伴左衛門に縁組し七百町とぬしづのんと。當はめて置た物姫君狩野めに心と通ひし。今日密く祝言有りと。奥目付より聞たれ共御意と有ばせんとなし。御在京の其間山三めも留守なれば。彼奴が方入する者なし少し

にても過りと。随分見出せ聞出せ慮外とせば打殺せ。御留守の間國中の某がさばさなり。此不破といふ鱈が見いれてあまり程の有らせまい。試して見たい新刃ない。一の胴の二の胴。望んで置けと云ひければ雲谷甚笑壺に入。政道正しと御家老様お屋形のしん柱と追従たらしく見ぐるしし。斯といしらず四郎二郎櫻の間に伺公し。姫君銀杏の前様より御掛物と仰付られ。持參仕候御取次頼み奉ると。云へ共入道伴左衛門じろりと見たる斗にて。返答もせず睨付るやしれ者よ。ろばに雲谷いゝさま我に手と取らすたくみ有。立歸るも不覺なり。幸々奥へ通路の鈴の綱。ふりはへひけば鈴の音おふと答ふる女の聲。宮内卿とて中老の局立出。狩野殿。姫君様の御待のね。お直の御用も有るとのおと。此方へと有ければ。畏て四郎二郎入らんとすれば。伴左衛門聲とけ待て。お家の掟と知すんばなせ物頭に伺ひぬ。知て背くの不屈千万。上より御免しなき時に刀物と帶し。奥方へ參ると禁制との御條目。あれ大小腕いで引すり出せ當番くと呼れば。宮内卿いや是の私ならず。姫君様より殿様へ御伺ひ。則京より名古屋山三殿の指圖にて。奥へ召るゝ四郎二郎なんのれ谷とさるふと。云へ共更に聞入す。お留守と預る家老の耳へ承

らぬ御意なれば。殿の御意でも叶ぬと。それ伴左衛門腕いで取れまつるせと立あがる。四郎二郎も身がまへして絶らば切らんず眼ざし。左右なくも寄りつゝす。渡せ〜と詞でおどす斗なり。時に奥よりお腰元つら〜と出。是々いづれもお姫様より御意が有。四郎二郎殿にの直に御用のとあれ共。丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度と有れば。是非に叶す姫君様此所へ御出との仰なり。四郎二郎の御用人。其外の男のふん雲谷の言に及ばず。御家老殿と始御前への言なりぬ。皆お廣間へ立ませい〜との権柄さ。道犬親子無念ながらつゝと立て。雲谷姫君の御前への。男たる者罷出す男でもない奴原に。侍のじぎ無用の沙汰と。四郎二郎に刀のこじり。打あて〜袴の裾。踏た〜つて白眼付お次の間にぞ出にける。御留守と云ひ女中の邊なと穩便にと共せず。御好の掛物梅に淡雪雉山鳥。仕つて候と紐と解て懸ければ。此由披露致さんに先ゆるりとお茶進じやと。扇の奥にあい〜と愛想らしき聲ト。男の側へ寄との。常に梨地の煙草盆。落雁のすてら羊羔より。菓子盆はこぶ腰元の饅頭肌ぞ懐のしき。物に憶せぬ男なれ共女中の色に目うつりして。氣と取られたる折ふし十八九なるわきつめの後結びも格別に。銚子盃前に置きしとやのに手とつ

いて。私にお姫様のお髪上げ藤袴と申者。しみ〜お咄し致しませいとの御事ぞや。御存の通お妾腹のお姫様。御蓋様への憚りにて大名商家のお望なく。心次第縁次第と田上郡七百町。御朱印握つて殿好み情ないの其許様。いつぞやより色々とお乳の人お局。口のすい程勤てもどふでもお請あいとのと。お愛しや姫君の余りのとに戀こがれ。私とお寢間へ召し藤袴。切てのところにちなりと四郎二郎と名と付て。心もろしに抱て寝よそちもおれと抱しめて。姫可愛と云ふて呉どもがき言がお愛しさ。とんと下紐打解けて。寢程抱く程締る程二人の心せく斗。どちらぞ男に成りたいと云ふても泣ても叶い〜ころ。なふ大名の手業にも有るべき道具の足ぬのや。ひよんな物とておむづる。自にいなせの返事聞切り参れとのお使。私も一分立つ様にお返事なされと述にける。元信頼と疊に付冥加に余る仕合ながら。度々お返事申如く諸傍輩のそねみと申。慾心に紛る〜と世間のあざけり。よし御機嫌に違ひ改易仰付らる〜とて。御恨候まじ御請とて成がたし。能き様に御取なし願入とぞいひ切たる。〜にべもなふ持あいた。如何に〜としても上の方へ左様な慮外申されまじ。少し物に品付て。始より約束の女房有と申なば。お胸の晴るとも有去ながら。其女房

何者とごどつゝの念の爲。今こゝで私と夫婦のための盃して。とつと前より藤袴と契約有と申さば。いゝな主でも大名でも此道斗いせんが先。此談合のどう御さんしよ。幸望む所。盃仕らふ。いや〜いや〜。我とても假にいや。佛神掛ての女夫どや誓文〜繪筆とどらぬ法もあれ。こふじや〜と抱き付近頃嬉しき忝し。是祝言の盃と一つ受て元信に。妻の盃頂く作法儀式のたふと四海波。腰元中が謠ひつれ奥よりお局島盛に。七百町の御朱印箱。姫君様の御祝言三國一とぞ祝ひける。四郎二郎合點もす逃んとする抱きとめ藤袴とい假名どや。自こそい銀杏の前。誓文だての盃いや成らぬとの給へば。いや我らの名さし藤袴。外に妻は是なしと尙いぢれば腰元衆そんなら本の藤袴早ふ〜と呼出す。お茶の間のさりのら五十余りの厚化粧。三平二満の口紅しなだれ懸る會釋顔。是がなんの藤袴しやららどい皮袴と。どつと笑ひのどやくや紛れ盡せぬ妹背と成り給ふ。斯る所へ不破伴左衛門宗末雲谷と伴なひ。遠慮もなく座上にすつらと直り。是四郎二郎。汝如何なる野心にのむ屋形と調伏し。亡さんとの存念有。さつと詮議と遠くべき旨父道犬が下知。申譯仕るの直に繩とけふのと。はや繩たぐつて見せのけり。四郎

二郎些とも騒がず。せめて形の有るとに申譯も有るべし。御屋形調伏とい此方の云譯より先御咎めの証據承らんぞと答へける。雲谷下座よりこりや〜証據の某よ。惣じて繪書の秘密めて繪といて調伏すると。人の知らじと思へ共此雲谷が見付た。此掛繪の和主が筆。梅に山鳥雪に雉。抑當家の高嶋の御屋形と就す。山へんに鳥と書ての嶋とよは文字なり。梅の梢に山鳥の高々と留りし。是高嶋にあらすや。雉にはるゝの聲有つて雪のふるとの心有。讀くたせば高嶋亡ぶる調伏。狩野といかりの野とのけり。姫君と心と合せ屋形と亡し。一國とおのれが狩場の野原にせんする表相。重罪通れず繩のれと。取付く所とひつはづし胸板はたと蹴たすまに。飛のる伴左衛門が眞向刀の柄にてはつしと打。直に抜んとする所と隠し置たる取手の者。十手八方鉄鞭とぶち立〜捻ふせて。高手小手にいましめ黒書院の床柱に思ふさまに。縛り付姫君の御朱印と。奪取れと群がる女中手々に枕鎗。長刀にて引つゝみ圍い防げば餘さじと奥と差てぞ追つめける。腰掛に叩へし雅樂介斯と聞よりたまられず。あけ廻つても奥方の勝手の知らず中口の。あけずの門碎けてのけと扉とたゞ。狩野、四郎二郎元信が弟子。雅樂介之信と云草履取。主といひ師匠な

り死ぬる道なら共に死なん高が繪書えがきの丁稚ていぢづれ怖おそいとも有るまい。相手の首取分くびとりぶんのと開ひらけよ明あいと貫くわんの木も。折まる斗たけに踏ふたゝき鳥居立とりいでにぞ跨またつたる。元信内もとのぶうちより雅樂介みやがけの満足まんじつした。身に過あやまりなき上に慮外りょがいとして姫君ひめぎみの。御身ごみのあやまち氣遣きぢし歸かへれ〜と呼よばれば。慮外りょがいと云もとによる。明あすば踏ふんで踏破ふみやぶると喚わめき散ちせば雲谷うんたに不破ふた。雅樂介みやがけと打殺うちころせと引返ひきかへして門かどの貫木くわんぎ。はづす所ところとつけ入いに雲谷うんたにが小こびたひすつはと切下きりくだげたり。あいたしと跳はりあがり二人ふたり拔ひきつれ打うちくる。あなたへ追詰おいつこなたへ支さへ城下じやうげとさして切出きりだる。四郎しやうらう二郎にやうらう地團太ぢだんた踏ふんで。倭人やまとびと共ともひさ〜と死しぬまい。親おやより傳つたへし一心いっしんの繪筆えがひのこ〜と観念くわんねんし。右みぎの肩かたに齒はと立てふつ〜と喰破くひやぶり。口くちに我身わがみの血ちと含くみ。襖戸ふすまどに吹ふけ〜口くちにて虎ことぞ書かいたりける。電でんもくらしいの眼まなこの光ひかり。怒いかり毛け怒いかり符ふ怒いかり爪つめ。千里せんりも駈かけん勢せいなり。道犬みちいぬの姫君ひめぎみの行ゆきがた尋廻たづねまわりしが。先繪書まへえがきめら仕しまんと太刀たちと拔ひんとせし所に。俄たちに吹ふくる風かぜさびぎ繪えにのく虎この形かたちと現げんじ。牙はとならして哮はゝる道犬みちいぬも強かち力りき者もの。組止くみどめんといきみあふ。虎この猛たけつて爪つめととき邊たと蹴けたて、揉合もみあしが。元もとより不ふ思し儀ぎの猛獸もうじゆ道犬みちいぬが燃も髪かみ。ひの唾つばへ打うちたげくるり〜。くる〜〜と持もて廻まわり。一振ひとふつて投なげれば。

堀ほりと打越うちこ敷石しきいしに類つらとすつてぞ打付うちつけける。虎この勇いさんで元信もとのぶの縛しぼと噛かみ切り。背せと差さひけてそばへたり元信もと頼たのて心付こころづけ。袴はかまの股立ももたちしほり上うひらりとこころの乗のたりけれ。虎この千里せんりの足早あしはやく風かぜに嘯なく身みもろく。追來おひきる敵あひと追散おひちしうけちらし。堀ほりも築地ついでも跳はり越こへ飛とこへ駈かけへ馳かり行ゆ。豊干ゆへん禪師ぜんじが四よすいの虎こ。李將軍りしやうじゆんの虎ことくむ繪えにのく虎こと動うるすい。古今ここん一人ひとり乗のたも一人ひとり。天下てんか一人ひとり一傘いっさんの譽えに世よにぞ殘のこりける。げに獸君じゆじんの一靈いつりやう。山野さんやにはびこり草木くさくと踏ふかり。田島たはたと荒あすとな〜めならず。近郷きんかうの百姓ひやくしやうこゑ〜に。三井寺さんせいの後うしろの藤ふじの尾お迄いたに見届けんた。此山科このやまの敷しきのげへ逃にげこんだに極ごくつた。皮かわに疵きずと付つすに毆たたき殺ころせぶち殺ころせと取とり喚わめき評説ひやうせつす。庵あんの内うちより棒ぼうついて小灯ことう燈とう提てたる男おとこ。何者なにものじや人の軒のき。打うちの殺ころせのどらうさんなりとぞ咎とがける。いや是こゝの矢橋やばし粟津あしづの百姓ひやくしやう共とも。此頃このころしがらさ山やまのら虎こが出て暴ある故ゆゑ。隣郷りんかうが云いひ合せ此敷このしきへ追込おひこだ。捜さがさせて下くだされと口くち々に呼よばれば。侍さむらいあざ笑わらひやい。虎こと云いひが日本にっぽんに出いた例れいなし。十方じふぱうもないと夜盜やとう押入おしいの手引てのりの。此庵このあんと誰たれとの思おもふ。土佐とさの將監しやうげん光みつ信のぶと云いふ繪師えがし。子細こさい有ありて先年せんねん勅勘ていかんと蒙かふり此所このところに逼塞ひつせきし。將監しやうげん年ねんの寄よたれ共とも某いの門弟もんてい修理しゆり之介のすけ正澄せいじやうと云いふ者もの。油斷ゆだんのせぬと棒ぼうふり廻まわしいさのふ聲こゑ。將監しやうげん夫婦ふうふ障子しやうしと明聞あききた〜。天地てんち

の間に生ずる物有まい共極めがたし。諸共捜せと鎗熊手ひつ提くゑいゝ聲たい松よつて狩立る。一ひら竹の下蔭にそりやこそ物よと火と上れば。暴にわれたる猛虎の形。人に恐るゝ氣色なく背とたのめてぞ休み居る。將監横手と打て。あら不思議や顔輝の筆の。竹に虎の筆勢に少しも紛ふ所なし。是の賊の虎にわらず。名筆の繪に魂入つて顯れ出しに極つたり。然も新筆今是程に書んず人の。狩野祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでの覺へなし。いづれにもせよ証據に足跡有るまい。物の試しと百姓共若草わけて尋れ共。虎の足形わらざれば書さ手も書さ手日利もめさ。前代未聞の名人やと。心なき土民等も拜む斗に信となす。修理之介七足退つて師匠と拜し。有がたや此虎と見て。繪の道の悟りと開き候共しるし。我筆先にてあの虎と消し失ひ申べし。名字名乗とさづけ御免しと受け度候と。懇望あれば將監悦び。今日より土佐の光澄と名づくべしと。印可の筆とあたふれば修理のいたゞ墨と染め。虎の順にさし當四五間とさながら。筆引のたに従つて頭前脚後脚腕より尾先に至る迄。次第に消て失けるの神變術共いひつべし。百姓共舌とまき子孫迄の咄の種。なふわの上手な繪書殿に。よいか山と十人程書てもらひ。金儲がしたいと云へ

ば一人が聞て。冬年お目に懸つたら。借錢乞の帳面と爰の消てもらふ物。お暇申と打笑ひ在所くへ歸りけり。こゝに土佐の末弟浮世又平重起と云ふ繪書あり。生れ付て口吃り言舌明ならざるうへ。家貧て身代り。薄き紙子の火打箱。朝夕の煙さへ。一度と二度に追分や。大津のはづれに店がりして妻の給のく夫の書く。筆の軸さへ細元手上下りの旅人の重すのしの土産物三錢五錢の商ひに。命も錢も繋ぎしが日影の師匠と重んじて。半道余りと夫婦づれよなく見まふと殊勝なる。夫のなまなる目禮斗。女房傍のら通主して。また是の癢りませぬ。賊にめつきりと暖に日も永ふなりまして。世間の花見の遊山のとさりくさりく致します。こなたの山影御罕人の。お徒然といさめの爲嫁菜のひたしに豆腐の煮染。さゝゑでも致しまして。關寺の高観音へお供して。春めく人でも見せませふと。女夫申て居ますれ共心で思ふたばつあり。道者時分で見世の忙し。洗濯物のつらへる仕事のはのいらず。日がな一日立すくみ何とするやらのらくらと。急げばまゐる瀬田鱒只今膳所のらもらひまして。練貫水の大津酒めくしうござりますれ共。此春のらお仕合がなとつて。殿の穴のら出る様に御世にお出なされませ。ほんにつべへ

く私わたくしが云いふとばつつのし。こちらの人の吃くと私わたくしが志こころやべりと。入い合せたらよい比ひな女夫によめが一組出来ませふ。ア、おはもじやと笑ひける。北きたの方聞かたき給たまひ。よふこそ祝いわふてたもつた。今宵こんやは奇妙きせうなと有あつて修理しゆりは名字ななと免ゆるされ。土佐とさの光澄ひかりあきらと名乗なをぞよ。其方そなたもあやのり給たまへとあれば。又平またへい時節ときせつと女房にようばうと。先まづへ押出おしだしせとつき我身わがみも手てとつき頭かぶとさげ。訴訟そとせう有りけに見みへければ。女房にようばう心こころへ進まみ出で。誠まことに道みちすがら百姓衆ひやくしやうしゆの咄はなと聞き。身みは貧ひんなり不具ふぐなり。弟あに弟子でしに土佐とさと名乗なをらせ。兄あに弟子でしのうらうらといつ迄いた淨世じやうじ又平またへいで。藤ふじの花はなのたげたお山繪やまゑや。総すべおさへた瓢箪ひやうたんのふら〜生いても甲斐かひなしと。身みともんでの無念むねんがり。尤なほとも憐あはれ共ども連添つれそふ我等われらの心こころの中なか。申まをも涙なみだがこぼれまをる。奥様おくさま迄いたは申まをせしがお直なほの願ねがひは此時節このときせつ。今生このいまの思おもひ出死いでししての跡あとの石塔いしだうにも。俗名よこな土佐とさの又平またへいと御一言ごいちごんのお免ゆるしは。師匠しせうのお慈悲じひと斗たたにて。涙なみだに咽すすび入いければ。又平またへいも手てと合せ。將監しやうかんと三拜さんはいし疊たたみに唾つよ付つ泣なるたり。將監しやうかん元もとより氣短きたんく。又またまては〜叶かなぬと吃くめが。こりや此將監このしやうかんは。禁中きんちゆうの繪所えどころ小栗せうりと筆ふでの争まをひにて。勅勘しやくかんの身みと成なたるぞ。今いまでも小栗せうりに從したがへば富貴ふきの身みと榮さかゆれ共ども。一人ひとりの娘むすめに君傾城きみかたぎの勤こつめとさせ。子こと賣うて〜程ほどの貧苦ひんくと凌しのぐは何故なにゆゑぞ。土佐とさの名字ななと惜おしむにあらすや。修理しゆりは只

今大功有いまたいこうあり。そのれに何なにの功こうが有あ。琴基きんき書しよの晴はれの藏くら。貴人きじん高位こういの御座ござ近く参まをるは繪師えし。物ものも得えいはぬ吃くめが推参おしまを千万せんまん。似合にあふた様さまに大津繪書おほつしゑしよいて世よとわたれ。茶ちやでも香かで立陣たちぢんれと愛想あいさうなくも叱しかめられて。女房にようばうは力ちからと落おし此方このあたと吃くに産付うみけた。親御おやごと恨うらみさつまやれと頼たのみなく〜又平またへいも。我咽わがすすぶえと掻かむしり口くちに手てと入い。舌したとつめつて泣なけるは理ことり見みへて不憫ふびんなり。時ときに鏡かがみの内うちよりも將監しやうかん殿どの光信ひかりのぶ殿どのと呼よはつて。痛手いたでおはたる若者わかしよ様さま先まづによるばひ立た。狩野かしのの弟子でし雅樂ががく之介のすけ御見忘ごみわすれ候まう。實じつも〜雅樂ががくの介のすけ先まづ此方このあたへと座敷ざしきに入いれ。承うければ四郎しやうらう二郎にやうらう殿どの雲谷うんこ不破ふたが惡逆あくさくにて。難なんに逢あひ給たまふ段々ついで具ぐに聞氣きき遣やしと有あければ。さん候まう某たれも供仕きよせり。雲谷うんこと戦たたかひの様に深手ふかてと負ま候まう。頼たのみ切きたる名古屋山三なごやまさん殿どの在京にやう。元信もとぶ危あやふ候まう候まうし。漸おだのがれ落おうせたと承うける。こゝに難儀なんぎの候まう。姫君ひめぎみ銀杏ぎんぎやうの前まへ元信もとぶと憐あはれ。七百町しちひゃくぢやうの御朱印ごしゆいんと持もて落お給たまひし。敵たか奪うばふて下したのたいとに隠かくれし由よし。二度にど姫君ひめぎみ屋形やがたへうつし御朱印ごしゆいん奪うばひ返かへさで。永ながく繪師えしの瑕か理りんなり某手たれて負まの身みの叶かはず。御加勢ごかせい頼たのみ申まをさん爲な。忍しのび参まをり候まうと。語かたりもあへぬに將監しやうかん皆聞迄みなきこに及およず。狩野かしのと土佐とさの一家いっか同前どうぜん力ちからに成なて参まをらせん。され共ども彼か奴やつらと太刀打たちうちのいつのな〜叶かなふまじ。姫君ひめぎみにも負傷かたがわらんぞ辨舌べんせつのよき人に。御屋

形の御意といはせ。誰つて取返す分別がござらふ。何れも云ふてお見やれと。頼に小敵類杖つき各小首と傾くる。又平何ぞ云ひたげに妻の袖引背中つき。指差すれ共合點せず。しんきとわらし女房と引のけてつゝと出。師匠の前に双手とつき唾と飲みこんで。此討手に拙。せしやが参り。姫君も御朱印もくくうば奪取て歸りましよ。將監きつと見。面倒な吃め。思案なればに邪魔いる。そこ立てうせぬのと。叱られてもおちるにこそ。膝共談合と申。口ころ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者がない。拙者が分別出し。叫ぬ時のゑん正すけさだ。あつちへ遣るの此方へ取るの首がけの博奕。命の相場が一分五厘。浮世又平と名乗てい。親もない子もない身がら一心。命の掃溜の芥。名の須彌山とつりがへ。倅の時のらさうこうなし。命にのへて申上るも師匠の名字と繼たい望みばつり。拙者めと遣りされて下されませ。申ッ申ッさりとて御承引ないの。吃でなくば斯ふの有るまゝい。こゝろく恨めしい喉笛と。掻やぶつてのけたい女房共。さりとて情ないお師匠じやと聲とあげてぞ泣居たる。將監なども聞入れなく。不具の癖の。述懐涙不吉千万。相手に成てり果てしなし是々修理の介。御邊向つて思案をめぐらし審ひ返し來られよ。畏つたと云ふより早く刀はつこみ立出る。又平ひんすと抱留て、まんまん待てくれ。師匠こそ情なく共。弟子兄弟の情じや此又平と遣てくれ殿共いはぬす。すつゝすり様。こりや又平。某やたけに思ふても。師の命の力なしと放せ。いゝいゝやゝゝ放さぬ。放さねば抜いて突ぞ。つゝさゝく殺せ。さゝく放しやせぬぞ。修理之介もめてあつひ。放せとと拾ち合ふたり。將監夫婦聲と懸放せと留むれ共。耳にも更に聞入れず女房取付。あれお師匠様の御意が有。おとましの氣違やともぎ放せば。女房と取つて投はたと蹴て白眼付。そのれ迄が氣違とい。女房さへ侮るもの。不具の何の因果ぞやと。どうぞ座と組み置とらつて。聲も惜まらず歎きける。心ぞ思ひやられたる。將監重ねて汝能く合點せよ。繪の道の功によつて土佐の名字とついでこそ手柄共云ふべけれ。武道の功に繪畫の名字。譲るべき子細なし成らぬと云切り給へば。女房居直り。又平殿覺悟さつしやれ。今生の望の切たぞや此手水鉢と石塔と定め。こなたの繪像と書とめ此場で自害し。其跡のどくり就と待斗と視引よせ墨すれば。又平領と筆と染め石面に差むひは生涯の名残の繪。姿の若に朽るとも。名の石魂に留まれと我が姿と我筆の。念力を徹しけん厚さ尺余の御影石。真へ

透つて筆の勢。墨も消す兩方より一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ。異國の王義之趙子昂が。石に入り木に入るも和齋に於て例なし。師に優つたる畫工ぞや浮世又平と引のへ。土佐の又平光起と名乗べし。此勢ひにのつて姫君御朱印讀共。取返せと有りければはつと斗に又平の。悉し其口吃禮より外に涙にけれ。踊り上り飛あがり嬉し泣こそ道理なれ。將監夫婦悦び心切にて心ざし厚けれ共。漱に向つて問答せんといふ有らんと給へば。女房聞きもあへず。常々大頭たいがしらの舞と好き。妾諸共わらわらどもつれわきにて舞れしが節の有るとい少しも吃り申されすと云ふ。やれ夫こそい屈くつ竟やうよ。試こころみに一節目出度ふ舞ふて立て。あつと答へて立上り古き舞と身の上に。なぞらへてこそ舞ふたりけれ。去程に鎌倉殿。義經の討手に向くべしと。武勇の達者たつしやと選ばれし。それい土佐坊。是の又土佐の又平光起が。師匠の御恩ごんと報せんはうせんと身にも應おこせぬ重荷おもいとば。大津の町や追分の繪に塗る胡粉こふちの安けれ共。名の千金の繪師の家今墨色と揚げにけり。斯かくて女房勇みつけ。又もや御意の變るべき。はや御立と勸めける。いしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男。紙表具の体なり共。朽くちて朽くちせぬ金砂子極彩色ごくさいしきに劣らじと。勇み進みし威勢いせいの。由ゆ々し頼もし我ながら天

晴繪筆の殊勝しゆせうさよ。唐繪からがひの焚たき張はり良よしとたてについたと思しめせ。お暇申てさらばとて打立出る威勢いせいの。鹹しほみ諸人の繪本えほんをど。譽ほめぬ者これなりけれ。あふ坂のせき。略りやく近ちかき火ひようとの聲高島の屋形やがたに。六角殿の姫君行方見へさせ給ひぬとて。旅人の改め問屋の詮議せんぎ土どのへさぬ斗なり。又平の今朝けさ七しちつ立ち門出祝かどいでふ中ちゆう腕でんに。例の熱爛あつらん三さん杯はいひつうけうつ立所に。やごとなき上臈じやうらふの跣足すわしの土に身も頼たのれ。伏見の方よりうるくと是こそな者。京の道と敷へてくれ。草鞋わらじとやら云ふ物とはのせて呉くれと詞つきの大拆おほひさ。又平ひとつ貌かたちに立はたのつて返事もせず。女房走り出で大抵たいていのお方かたでない威いの備まのつた見所有けんしゆりとお側に参り。恐おそれながらお屋形やがたの姫君様と見参らす。我々の土佐の將監が弟子吃くの又平と申繪畫の夫婦。狩野の弟子雅樂がくの介けいに頼まれ。お迎むかひに参る折せらなり必かならませ給ふなど。嗚なやけば嬉うれしげに。自みづから銀杏いんげいの前。道犬雲谷が追手おしすき間なし。よい様に頼たのむぞやとの給へば。又平土邊つちべに頼たのみすり付悦うれびの色勇いさみの色。氣きと急いそげばなと物云はれず心こころと仕形しがたの腕うでまくり。元威反打居合げんきはんたゐあひの真似まね扱あ打うち撫な切き拜ひら打うち。組合くみあ拾しり首くび手てにとつて。踊り拳こぶしの武士氣ぶしきとあらひし。地生ぢせいにのぐまへ参らす。夫婦が所存しよぜんを頼たのみしき。程なく八町やちゆうはしりるの間屋組頭まなやぐみかみ。組町引

しおこしのへつて聲をるに。六角殿の姫君朱印と盗み出で給ひ。御家老より御詮索裏屋小路もあらためよ。別して繪書の屋敷し有る人の勿論犬猫も。内と出すなと裏口門口はたくとさしもの又平取こめられ狩場の鹿の如くなり。不破、伴左衛門長谷部、雲谷。着込の兵百騎。ひら立來つて家々に押入く捜しける。又平一期の浮沈ぞと。女房諸共姫君と押し圍ひ。隣どがばと蹴破てぐつと抜けたる壁あつさ。氷の様成る大刀物さし出す首と片はしらの。切ならべんと壁に添ふてぞつゝ立たり。雲谷聲とけや。是ぞ音に聞く。土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲きこぼつて捜して見よ。承ると一番手捕たく。捕たくとどつと寄しが。しどろになつて引き返し。なふ怖やすさまじや。何の知らず家内にい人大勢みちく。或い奴の形も有り又い若衆女も有り。人間手の猿野猪鷲角鷹。爪と研ぎたて眼と怒らし寄付るゝとでなし。なふくゝいやと身ふるひし舌と捲いてぞ恐れける。何と吐す狼狽者。人三人とも生まれぬ荒屋何者が有るべきぞ。察する所見世に張たる三文繪と生物と見違へし。怖いと思ふ心の眼が眩んだ腰抜共。それく詭とぞち放せ。ぬるいくと下知すれば。窟口ひつ懸るいやくと。なんなく見世と放しけり。内

と見れば不思議やな云ひしに違ひも荒奴の。影ともわろす幻ともまだはのくらき曉の。鳥毛の繪ささ揃へし土佐が魂寫し繪の。精霊なりとも知らばこそ我もくと驅け向ひ。打てども突けども手に取れぬ。露の命と君にくれべいと。そめしだいなし嫌ひなし相手ならばす防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等巖敷にも足らぬのす奴。我に任せと捲りのれば。片肌ぬいだる立髪男。大盃とひらりくと閃めし。眉間にふつたる唐芥子。のら。のら。のらにしさ。黒白も別らす引のへす。師匠の雲谷堪りのね。片端より打みしやぎ手なみと見せんと飛んでのゝる。優しや優者の女わざいにさきと頭巾。藤のしななとかつとのべ。ひんまどふてはたと打。しと、打つとひらりとばつし。受けつはどいつあさ衣の玉櫛。ひくしき若き法師の現れ出。勇みのゝれる有様のあみや鯨の瓢箪く。持つてひらいて鉢叩き叩けばすべり。打てばすべり。ぬらりくと手に堪らす俺みはてゝぞ支るたる。不破が郎等犬上團八。そこ退さ給へ人々と。打つて出るや現の闇の。座頭一人とばくと。とぼつく杖とふり上く。盲目打にうつてんげり。余さし物と頼いてのゝる團八が弟犬上三八。二八斗の小人まくらがへしの曲杖。とつ取くばらりくばらりく。

うつ波枕のす枕枕がさねに打亂れ。散りくゞにこそ引たりけれ。伴左衛門怒りとなし手にも足らぬ雜人ばら。しや何ごとの有べき武士の刀のあなばい見よと。眞一文字にのけたりけり。あら凄じやこゝろに形の沙門頭の鬼神。鬼の念佛噛みくだく。牙と鳴らし角とふり向ふ者の眞向。撞木と持つて叩き鐘くわんくゞくゞ。耳にこたへ骨に染み。進みかねてのひき足も。鴨荒鷹鷲角鷹。一度にさつと飛び來りむらがる勢と八方へ。追つ立て蹴立てつゝきたてくゞ。翼の嵐夜明の風。鷲の聲々逢坂の夕告鳥に。しらくゞと白み渡れば白紙に。有りし形は彩色の繪に寫りたる筆の精。天骨の妙とも云つゝべし。又平勇んで女房の袖と引。物は云ひたし心進んで舌まはらす只くゞと斗りなり。爰な人敵が詰るけ事急な。廻らぬ舌と言はれぬとまひでくゞと言ひければ。それよく氣がついた。今目前の不思議と見よ。我らが手柄で更になし。土佐の名字と繼たる故。師匠の恩の有がたさよ。敵の中へ駆け入て命限りに追散さんと。大勢にわつていり西のら東北のら南くもでるくなは十文字割りたてとんまはし。さんくゞに切り立てられ。さしもの軍兵堪りのね。八方へ逃げ散つて残る者ころなりのけれ。さあしてやつた此上は。きくゞ愛には片時

も叶ふまじ。都の方へと姫君とくゞ逢坂山の時鳥また初聲の口は吃り心は鉄石のなかどがひに。勝つた優れた越へた峠は日の岡の。石原草原足もまどろにくゞくゞ。吃り廻つてのくゞくゞ登りける

中の巻

里は都の未申なり通ひても。通ひたらぬぞ三筋町西の洞院中道寺。右衛門が馬場の一方口未大門の遅櫻。忍びてひらけ一ばん門の東がまらむ。とんとと打つたる太鼓の番太。何者やら大門口に切れてゐると呼はる聲に。忘八揚屋茶屋祝昇廓の年寄立合。見れば年頃卅斗風竟の侍。二つ重ねの白無垢白茶字に縫紋紅裏に。源氏襲の裾くゞみ南蠻とろの大小。對の金鎧毛彫は波に山王祭七所。御物持給の印籠天川珊瑚珠は然もなくて。大疵五ヶ所肝先にとゞめ有り。委細に書付。官領所へ訴たへさせ死骸と團ふ横はし。二階のら女郎買手遣手のめは首のばし。松は寝はれた顔出しまだかきくゞの禿共。つね彌いく代と手と引舟も走りきて。堀にくらのけ木に取付。おはる様あれ見さんせ。吉野様の大膽な掃溜山へ上つて。海老の皮で足突のんすな。突いたら大事の。切れて死る人さへ有ると。あだ口々

の喧しさ。あの切られてゐる人は葛城様の大盡。不破、伴様に似たじやないの。はんにとよじや伴様に極つた。マ、伴左衛門が切れたと京童の物見だけく。手負見がてら傾城見に。群衆はともしも分けられず。すはや檢使と人と拂ひ。官領の雜式供人引具し。死骸と解いて疵改め。江州高島の執權不破の伴左衛門に極つたり。扱此者の買ふたる傾城は何と云。意趣有る者の覺へはなきの口論などはなかりし。眞直にやせ當分隠して。後日に知れなば此事なりとぞ仰ける。年寄罷出。上林の葛城とや太夫と。千二百兩にて請出さる、管の所。各古屋山三とや牢人衆と葛城と。行末深い約束とて談合成のね申せし故。兩方意趣と含み屬られしが。是ならで覺へははずと詳のにぞ云ひわくる。雜式一と口書し。名古屋山三は牢人なれ共元は伴左と朋輩。あたと大事の詮議なり先葛城が遣手と呼べ。遣手出ませと呼ぶ聲に玉は臆病年寄なり。やら恐ろしや私が出てなんといはふ。縛られたら何様せよぞ。なふ悲しや目がまふた氣付は無いのと泣居たる。是では埒が明まいとれぞ氣轉な遣手衆と頼んで見んと云ふ内に出ませくと頼の使。思ひ付た一文字屋の和國に付てゐる。みやと云ふ遣手は越前の敦賀で。遠山と呼ばれた全盛の太夫。戀故今はあの体すよげなふて

337098

智恵まんく。閻魔の廳でも云ひぬける此みやと頼まふ。あれく彼處へ大福帳のたげて來るは。みやじやないのといふ所へ。おまよぼのらげの忙がしげに。皆さん是にござりませす。まあくさやうといことが出來まして。御苦勞でござんすと云捨て通ると。是よみやや檢使の衆葛城が遣手と召るれ共。玉は愚鈍で臆病なり何とお問なされふやら云ひ致へて濟ぬと。廊中の頼みじや葛城が遣手に成て出で。請返答としてたも恩に受ふと云ければ。あの死骸の傍へ出るといふ。去りながらいやと云ふも子細らし云ひ損なふたら大事。口に任せて遣つてくれふてんはのはとぞ出にける。雜式鉄轡よこたへ。そのれは葛城が遣手。用有つて召出すに何として遅なはる。横着者さすい者とのさとのけてぞ叱らる。彼のさんわいの頭から叱らんす。なんの氣隨でとわん志よ十二人の太夫様と一人七て廻せば。べんけい遣手が忙がし口説の中と押し隔て。打物業にて叶ふまじと日に幾度の詫言やら。よるの身持は揚屋の吸物同前。ちよつちよと座敷へ出る度に一杯づつも飲む酒に。ふらく眠りのいき倒れ朝から晩迄ひの袴。花色縹子の巾着も。中は秋のよの長紐さげた鍵の穴から天と覗けばはのく明。妓樓達の身じまい風呂の手洗水の髪洗ひの。鍋

上杓子よ白よ杓子よ。正月志まへば節句御日今日は二日の拂日なり。爰もすへたしうはら辰も、背中に腹。商賈には換られず皮切こらへて出る心。其様に言はんすな廓は諸國の立合。常住切つてのはつての是程の喧嘩は。お茶のこく茶の子ぞや。、仰山なと笑ひける。雜式怒つていやさ己が身の上は問はず。此伴左衛門千二百兩にて萬城と請出すとな。傾城は賣物直段極る上うらは。名古屋山三が障碍いふても叶はぬ筈。然ると違亂に及ぶとは汝め等がもがりと覺へたり。切手も知らいで叶はぬ筈。眞直に申せと詞あらく問ひくる。少しも臆せず會釋して。御意の通り賣物とは申ながら。神佛の奉加と同じとで。銀出しながら拜するは恐らく世界に傾城はつあり。買ふてくれるが嬉しいとて親が、りやお主持の。懸路の間の一寸先見へぬ所と傍ら見て。買人のれ身も廢らす女郎ものぼさぬ様に。舵と取るが引舟のめのさやはづすが遣手の役。大事にのける証據には世間に心中十あれば。廓に一つ有るのなし。伴左様は御大身お銀に不足も有るまいが。御主人のお耳に立ち。お身のがい共成る時は御一門の評議にのり。人とはぐの欺すのとおつる所は廓の難。爰の意氣とたてるが色里のたしなみ。身請の談合破れたも伴左様のお身の上。大事に思ふ上の事でござんす。道で切れさんしたはそこ迄は存じませぬ。定めし死とも有るまいし尤通げても見さんしよし。そこに如才も有るまいが先の相手が強いる。身の取まはしのわるさの知らんでやんすと答へける。檢使の人もてあつらい能いはくもふ黙れ。一時に詮議成がたし死骸と酒にひたし置。後日の評定たるべしそれくとて役人供。桶まつらひ死骸と納め。酒汲み入て繩がらみ籠屋へやれと昇さ上たり。雜式重ねて年寄く。商賈なれば傾城には構ひなし。去ながら夜前よりの買手共事濟む迄名所と。一々に書き留めよこりや遣手め。重ねての詮議には水とくれる用心せよと。赫して立て共おちもせずとのんせ。銀くれる遣手に水くれるとは悪そうなど。笑ひと機に云ひまらけ先と拂ひて立歸る。權威と見せて突鳴す鉄棒のよと三味線に。引のはりたる三筋町。戀の市場となまめのし。名古屋山三春平は。通ひ馴れにし六條の道には石がいくつ有る迄。よみ覺へたる一貫町の茶屋が。發賣のよしやよし。里になげうつ命ぞと。大門口の與右衛門も門番には二代の後胤。平の供して口軽く舞鶴屋にぞ入にける。亭主傳三と始とし數多の女郎遣手迄。是はく様子はお聞なされふが。先四五日もお出なされぬがよいはづ。日頃意趣有る伴左衛門切手は名古屋

山三じやと何處ともなしの取沙汰。葛城様のお案と我ら夫婦の氣遣。此おみやが辨舌で今日はずらりとやりましたが。伴左衛門が死骸と奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名所書き記せとのいひ付。お身に覺へがなふてのら詮議まんぎも喧し。お前と外様へつくばはせて此傳三が立ませぬ。帳面に留ぬ間に先お歸りと云ひければ。いや傳三そふでない。お手前こそ念比。廊中女郎衆へ苦勞とつけた此山三が。詮索にあふ悲しやと屈んである程ならば。里通ひも妓交りもわたまのらせぬがよし。先和國様のお禮申。大事の遣手とお貸しなされ忝い。扱みやの働さ心ざし詞の禮はいふ程古。三千石とつた山三が手ついで頭と下る。額に千石兩の手に二千石。主人の外一生に。此式作法はみや一人是が禮ぞと手つければ。勿体ないなんのお禮が入ませふ。ちよつと葛様に逢はせて去なせましたい物じやが。私がいけば目に立。和國様一筆進せて下さんせ。いや文もいひじや私らが直に誘ふて。遊に出る貌で連れまして來ませふ。皆ござんせと座敷とこそは立ちにけれ。然らば爰は人もくる。二階へお通りなされといへば。何が怖ふて隠れふぞ。伴左衛門と切つたるは誰ぞの思ふ。此山三が手にのけ打つて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅のど彼めと

傍置たりし時。狩野、四郎二郎と身が取持にて奉公に出せし所に。伴左衛門親子雲谷と云ふ繪師と引。御在京のお供の留守無實といひのけ刃傷に及び。四郎二郎は行方忘れず。あまつさへ外戚腹の姫君銀杏の前。四郎二郎に心よけ御祝言有る筈と。障子入て狼籍し某迄も譏奏し。牢人の身と成たれば重くの意恨有り。殊に四郎二郎は隠れもなき名筆。大内繪所の官にも進む身と。某まゐて顔に留め難儀とあけて見て居られず。姫君と夫婦になし四郎二郎さへ出世すれば。本望く生けて置ば四郎二郎に如何なる仇となすべきと。傾城の意趣と幸に討て捨たる伴左衛門。まれて切腹する斗四郎二郎故に捨てん命。聊の惜いと思ふにこそ武家に生れた不肖には。大門口で立腹切り新造衆や禿共。芝居でするよなどして見せふ。葛城はどふじやの亭主誼へと三味線の天柱に貌とすぢのひ身。糸の音色も目の色も人よきつたる肺はなく。亭主はけつく色違へ先お咄はいらぬ物。内外の者共必仇口聞くまいぞと。わななく慄ひ手酌にて。滅多に呑んで居たりける。みやも聞くより驚きて扱は我二世迄と。思ひこふたる四郎二郎様に斯く迄深き恩と見せ。お命とも捨てんとは頼もしや忝や。我こそと名乗て一禮いはふ。いやく姫君とやらへ聞へては。御祝言

の邪魔と違ざけらるゝは知れたと。只余所ながら彼のお方の爲に成り。お命と助けるこそ我夫への奉公と。思ひ定て是傳三さま。お侍の覺悟の上と女子の了簡推參とながら。おのさんに腹さらせ思と受た四郎二郎。何國の浦で聞付てもよもや生てはいられまい。人の所縁はしれぬ物をれらと入れへよつゝさて。誰が悲みとならふから山三様のお身の難。脱るゝ工面は有るまい。思案は今でござるぞやと。よろこいふのも夫のこと。案じて余る涙の色。胸撫でゐるすも道理なり。まわが身がいふ通り。とつ取て廊の迷惑お仕置には法が有る。腹切りたいとおつしやつてもよふわたゝのに。見苦しむらに粟田口下らとよも量られぬと云へば。山三はつととして、よゝ所へ氣が付た。三味線所でないはいの。相手は主持こちらは卒人おばれ者にしなされ。木兎の留つた様に獄門などに隠されては。先祖一家の恥辱今さつぱりと腹切つても。其段うらは死骸迄彌恥は重う成る。主持たぬ身の無念さよと。齒切として涙ぐむ。みやは聞く程我男の。身に運りくる悲さのどふぞよゝ分別して。進せて下され頼みますと身に引かけて歎く跡。亭主暫らく思案し是ゝよゝ仕様有り。爰へよりやと小聲に成り。是とついでに萬城様と。とんと講出し奥機に定める時に

親方とはたせ合せ。手形の日付とつと跡の月にして。外様へは借宅見たての其間廊に少し逗留分。すれば疾のら御夫婦と云ふものよ。昨日迄伴左衛門かくとひた状文。握つてゐらば密夫の証據儘なり。女敵討は天下のおゆるし千人切つても切り徳。此分別はとよ有ふみやは悦び、でさた〜。目出度い〜智恵者めと煽ぎ立れば。こむしやうに目出度がるまゝ。當分請出すお銀がない。若お腰の物とそれ迄の質物に遣はされば。私か加判で太夫様とたつた今門と出して見せませんが。お侍にお腰の物とはなふおみやとよもゆゑるはしの。おぬしのお身斗の不便になさるゝ四郎二郎迄。命と助るとなれば御了簡おとばしませと。手と合せるやら歎くやら山三も共に涙どうのめ。まゝ何が扱〜。皆の衆に苦勞とさせ。何しに否と云はふぞ近頃過分千万。是は重代の左文字。二千五百貫の折紙有り。惜しと思はねども。七才の時より今日迄ついに脇差一本で。他所に居たと知らぬ身が刀の冥加に盡きたのと。涙は雨や鞆靴の脇差斗で奥に入る。後姿と見とくりておいとしゃ〜。傳三様とよぞ首尾してくださんせ。まさぞへが入るならば私が縋子の帶も有る八丈の袷もござんすと。歎はともに泣聲の、まゝとくによふいやつた。かれも男じや氣遣す

な女房と惣嫁に賣つてなりと。母と明けぬといふ事はなひて出るぞ頼もしき。みやが愛身のうき思ひ。口ではねば氣につらへ目に流るゝは百分一。胸に涙のとゞこほり山三様に骨折も。男の心の悲みと。思ひやり手となつたる者のぞんざいで成られふの。戀がこふじて遠山が此体になつたとは。知らぬの聞ぬの男めが何所か居るやら死んだやら。梨も磔もうつとりと煙草飲んでも。煙管より喉がとほらぬ薄煙り。人の見ぬ間に思ふ程泣くと老よざいの情なや。内と首尾して葛城は走つて来るより駈上り。みや殿爰にのいのひ世話であつたげな。忝ないぞや土になつても忘れはまませぬ。おれが心と察してたも。ほんに物日なのに瘦たはいな。こなたは今は何んの苦もなふて樂である。遣手の身は蒲山しい山様は奥にの。ちよつと逢ふてこふぞや。後にくと云ひ捨て、行くと見るにも猶涙のしを愛ぞといふ中にも男と傍へ引つけては。愛と凌ぐも力が有る此身には苦も有るさいとや。明暮つさあふ人目にさへ樂な様に見へるもの。遠國隔てた男氣に思ひやりのないとは。無理ともいはれず去とては。切て有所が聞きたいと聲とたてねばないじやくり。氣も沈み入る時しもあれ心細げな鼓弓の聲。あはれ催す相の山我れに涙と添へよとや。夕朝

の鐘の聲寂滅爲樂と響けども。聞て聽く人もなし。通りや。只の時さへ相の山聞ば哀で涙が溢れる。悲しゆて成らぬとふくらに。あた聞ともない通りやくといひて涙と押拭ふ野邊よりあなたの友とては。血脉一つに珠數一連これが冥土の友となる。またゝるい手の隙がない。通りやくといふ聲に心に苦のない新造禿。ばらくと走り出。こちら好じや相の山。聞て泣きたい所望くと立ちゝる。意地のわるい子供じや。それ程何が泣たいと。やつて去ると巾着の紐と解いて取出す。錢は一錢二世の縁切れてもきれぬ笠の中。泣沈みたる顔見れば戀し床しの四郎二郎。互ひに「ア、ア」とばらりに目くれ心はまみくと抱付たふもあたりには禿が目元小ざのしく。堪へるだけと包めども咽びふくろび泣ぬたり去せましたらよい物の。まらつと哀な心と語ふて聞せてくださんせ。あつと涙にするさ。ら鼓弓の聲も細き聲。定めなき世に捨てられて。身の寂滅が知らせたく文は書け共便りなし。獨寝さめの友とては夢に見た夜の面影の。是が寝さめの友となる。折しも二階奥座敷こいよくと手とたく。あいよくと禿ども。立つ間遅しと走りより。是こふしたともめらふのと愛命とも捨てなんだ。よふ顔見せてくだんせと。絶れば男も抱き締め涙の外

は聲もなし。なふ戀しいの懐しいのとは大抵戀路の慣ひぞや。それとんと打こして主親方にも背さしゆへ。奈良伏見迄賣り渡され今此京で遣手となり。花の都も我身には鬼界が島に住む心。册凍瘡に苦しめても手足の苦勞は成りもせふ。心と痛める斗じやない力業にも才覺にもうなはぬ物は。逢ひたいと思ふて遣瀬がなつたと。あまへ口説ぞ不便成る。四郎二郎も盡させぬ涙、道理くいとしや。たびく文でも云通り。和女の蔭にて大事の繪と書き譽と取り。契約違へず身請とせふと思ふ間に不慮の事をも命が有るといふ斗。思ときた名古屋山三我ら故の牢人。行く先もく目出度いと云ふ字は書き様も忘れて。今は扇團の繪あしや釜の下繪に露命と繋ぎ。大洋でとへば奈良にといふ難波でさけば伏見とやら。是は采女雅樂の介二人の弟子の介抱で。九四年めに顔と見て嬉しいとはとこへやらおれと云者ないならば疾によい仕合。前垂のきはさげまいと親御の事まで思はれて。生た心はせぬぞとて。男泣に泣ければそふ打明けてくだんすがほんくの伊眞實。私はいつそ親のと思ふ所へいゝなんだ。私に罰が當らずは當る者は有るまいと。口説立れば四郎二郎二人の弟子もとも涙。さゝらの竹も古の紫竹にそむる斗なり。稍有て四郎二郎先いふ

へきは。名古屋山三春平此所にて不破、伴左衛門と討て。詮議に遇ふ由洛中の是沙汰。意恨のもと某故聞捨てとわれぬ挨拶。廓の説はとふぞといへばさればいな。詳しくとも聞きました山三様にする世話は。こなさんへの奉公とさまん心と碎いて。何の波風ない様に十の物が九、追付坪が明く筈で。あれ奥にじやはいな。是は大慶先通つて對面せよ。いやく待たんせそりやならぬ。こな様と尋ね出し。姫君と夫婦にせねば侍がすたると。今も今云ふた人に逢ずといんでくださったんせ。愚痴なと斗。我故に一命と果さふといふ山三じやない。逢ずに歸つて人外の名とこれ。けまう逢はせまいなれば後で腹と切らふのと。脇差に手とくる。死なんせではないはいの。外に奥様持つまいといふ誓文立てあはんせ。姫君は扱置たとへ餅屋のお福でも。山姥と祝言するとも。山三が詞と一たん立てすにとわれふの。世間見た様にもない氣が狭いぞやと恥しむる。世間は唐土迄しつても氣は武藏野程廣ふても。大事の男と人には添はさぬ。山三様にあふて四郎二郎が女房は。此みやでござんすと罷出て断らふ。云ひたくばいや詞の中に脇指と。此腹へ突さこむとふぞくと語られて。泣より外は何といふも大せつさ。そんならいふまい息才であてくだ

んせ。去ながらと云ふ言振らるゝなら。言振て見てくだんせと。まだとどくの忍び泣。尤も男のつら役。斯ふいふとてなんの如在が有物ぞ。弟子衆ちへと涙ながら奥へ行く間も惜まれて。是采女さま雅樂さま。祝言の咄が出たら言ひ消して下さんせと。頼む返事のいやふ涙に紛らし入にけり。心元なさあふなさに心騒ぎて落着かず。襖の際にさし足し。立聞すれば伴左衛門と討とめた物語。嬉しや女房事の出ぬそふな最ちつと聞ふ。あの耳語のなんじやまらぬ。聞きたい迄と耳よせ。悲や。連て歸つて姫君と女夫にせふといひくさる。こちらの男が利口そうに。こなたの詞の背きませぬと。吐しづら何事じや。聞くまい物と腹の立つと。耳とふさいつ立つ居つ身ともみ歎くぞ哀なる。舞鶴屋の傳三郎遣手引舟下男。いさりさつて大聲あげ。こりや。葛城様の身請さらりつと埒明た。あどの三月二日に暇とやるとの一札。王様の御給旨より高直な物握つた。乗物の戸とぐわらりと明けて。今でも大門お出なされと喚く聲に。人々悦び走り出。お手がら。酒呑童子の首より取にくいと。主もたぬ身は爰が過分手と引あふて門と出て。名古屋山三と葛城と後と迄の咄と殘さふ。亭主近付になつて置さや。狩野、四郎二郎元信廻り逢ふ手

に。互ひの苦勞は知る通身は葛城と請出す。四郎二郎は大名のお姫様とはり出す。祝言の夜は勝手へ見まや。初みやの禮は今申さぬ前垂鑑と捨てさせ。武家の公家の町人の望み次第に數ならぬ共。拙者が親分先づ姫君の祝言には。待女郎に頼もふと勇みかけても投首に。目も泣はらして返事もせず堪へ兼てつと出。云はんとすると四郎二郎。柄に手とのけ腹とさすれば手と合せ。泣く泣く退れなと堪られず思ひきつていはんとす。四郎二郎胸どしわけ既におふよと見せのくる。こくや四郎二郎様私やなんにも申ませぬ。は息才で姫君と夫婦になつて下さんせと。わつと叫び伏しければ。共にせきくる四郎二郎。よい合點。廊の衆は涙もろく目出度いにも泣たがる。身請する女郎衆に名殘惜いは尤ながら。他國へ行ず死はせず追付逢ふ泣やるなど。外にいふさへ包みぬ目はうるくとなりけり。お乗物が参つた早ふお出なされませ。いや。乗物ふるひと立出れば。一家の太夫天神のこひ葛城様さらばや。去らばでござんす門迄送れ跡賑のし。うつたりまふたり舞鶴屋傳三が万うけこんだ。おさみやげと遣手衆お春れ夏と勇め共。みやが心はあきながらの腰の巾着ふらくと物寂しげにぞ見へにける。花の三月はや過て娘の年も廿二は。いつ

のまにらは長持に桐の葉茂るよめり月。銀杏の前の御祝言名古屋山三のはらひにて四郎二郎元信と北野の社人に假座敷。名古屋が家の子世繼瀬兵衛興添にて。供女中の出立や。地黒地淺黄紅ひわだ右近の馬場にぞ着給ふ。並木の櫻くれのゝりまだ人貌も。白無垢着たる若き女の横台より。嫁入の供先押わりく打も敵くも事ともせず。しつゝと紐つて引程に乗物の戸は碎けて放れ。姫君あつと叫び給ふと胸ぐら掴んで引ずり出し。土堤に押つけ引すゑたり瀬兵衛刀の反と打。六尺徒士衆との取廻しとこと放せ放さずば。擲殺せ捨殺せと口々に呼ばれば。姫君制して、黙つていやのまやるな。嫁入する身に女のさいで只のこととは思はぬ。四郎二郎殿の妾の但時の藏ふれに。未では妻にせふなどと男の當座まに合と。一すぢな心より其恨みであらふの。我が身にしらぬとながら。股と持つ役なれば聞まいとはいはぬ道理さへ立とで。負る道なら負もせふ。又筋もない道いつてみや我にも手も有足も有。銀杏の前が理不盡といはれては大人氣ない。相手むひにしてとさやなんぞ聞ふと。口は陸路とわけながら。胸はしどろの山坂や顔は躑躅のごとくなり。女溜息顔とあげ、流石でござんすな。其美しい出やうには。こふ取た胸倉と放し襟に困つた。我とでも中

と狼籍する氣は微塵もなく。お乗物に縋つて歎きと申お情とうけふと。七本松の跡先に是迄窺がひ参りしが。わたまのゝりかどふもなく思はず慮外致せしなり。さやうくし白無垢着たは討果してのなんのといふ。おとしでも見せでもない思ふ願ひが叶はずば。西所川原の舟岡へ直に飛ばふと思ふ氣で。私かための修羅出立高いも低いも女子には。大なれ小なれ此氣はあれどいはぬでもつた世の中。色に出さぬと謹慎と心で心と叱つて見ても。いゝなる慾もはなれふが男によくは得離れぬ。去りとはきたない氣恥らしゆござると。聲とあげ譁ともいはず泣わたり。瀬兵衛と始女房達御祝言の時刻ちがふ。道行斗いはず共。いと斗申せくと責ければ。御尤々私は土佐の將監が娘。稚名はお光親の愛瀬に身とらうり。越前の敦賀で遠山とやせし流れの者。四郎二郎殿とは故有て。起請二筆書ね共釘のすがいより離れぬ中。身も持つづし方とらうらへ今は六條三筋町上林が内みやと云。流れの身より淺猿しい道手はしてもとのれやれ。一度は狩野の元信が内儀といはれゆく。四年が問の氣の張弓はつたりと弦されて。泣にも力あらばこそ無理ともそん共余り無法とながら。永ふはいらぬ一七日今宵の嫁入と下されば。跡はお前と万々年七日添

ふて別れて後は此世の生顔見せまいし。たとへ死んでも彼の人の未來の廻向は受ますまい
最ふ此跡はすませぬと。涙と流し手と合せ伏轉ぶこそ哀なれ。姫君呆れておはせしが聞け
ば笑止憚はしや。いやと云ばたいてい嗣愆者といはれうす。心得たといふてあら迷惑する
は我一人。新枕はどふころどきはひのつて行く嫁入。道のら貸して歸るとは咄にも聞ぬ
と。こちらや義理すくめになつたのと聲と上て泣給ふ。道理のうへの道理なり。や、有て涙
とおさへ、よし／＼合點した。和女が其思ひのらは男も心にのゝる筈。二人の縁の離れぬ
中へ嫁入して笑しうない。蓋ものけこも打明けたこそ女夫なれ。男と貸してやる程に互ひ
の心と晴らしてたも。去ながら余りのけこも明け過し。底振さやつたらこちらや聞ぬと。涙
ながらにの給へば。有がたやと遠山は姫の膝にいだき付。貸すお心より借る心御推量遊
ばせと。泣聲よそに飛梅の神も憐み給ふべし。迎もなら早いがよし元信は兼てより。傾
城好と聞しゆへ。此小袖と見や廓摸様に言ひ付た。是着ていきやと袷褌脱いで七日といふ
もいま／＼し。來月一はい貸すぞや。志は有がたければ終に別る、此身なり。然ら
ば七、四十九日の中は私が妻と覺しめせ。此分で死んだらば定めし男の餓鬼道へ墮ちませ

ふと。泣く／＼たてば姫君。そふいふて皆吸ひ乾しやんなどこそ少は殘してたも。こちら
是のら腰元つれて歩ふて戻る。あの乗物で皆供しやと歸るさど見て。遠山は姫君様の情程
我身の罪は重なる。借る時の地藏菩薩に捨てられ返す時の閻魔の應。どふ云ふて脱れよ
と。涙と／＼こふ神垣や神も佛も見どはしに。酸も甘いも梅青む北野の。假屋に嫁取の嫁の
手道具。御厨子鏡臺うちみだれ箱。葛籠のひかけ狭箱。長刀持せて遣手のみやが來るとは
思ひがけもなし。其心底の屈さしと姫君の情といひ。あた／＼黙止がたければ門弟雅樂之
介。采女隼人大學なんぞ宗徒の弟子共。すべよくまのなひ春平にも内意と得。表向は銀杏
の前御入有りしと披露すれば。方々の音物樽よ肴よ巻物よ。太刀折紙の馬代銀五拾目かけ
の蠟燭の。明ぬ暮ぬと賑ひて今日五日めのあさ上下。雑煮のこく餅子持筋つさ／＼しくど
見へにける。其日もやう／＼傾ぶ頃。名古屋山三春平お見廻申と案内有る。雅樂介出む
るひ。先以て此度は姫君様了簡うつくしく。おみやも念晴れ元信心も落付申と。皆是貴公
の御蔭門弟中も悉く。悦び存候と何れも禮となしにける。是は迷惑元信爲めと存れば各同
前の大慶。今日は五日め五百八十の餅と搗いで。里歸りといふと縁邊の式法なれ共。親

元は遠所祝ふて我が宅へ呼びたいと。葛城も申がらよつと尋ねて見たいとあれば。雅樂の介打笑ひ尋ねるに及ず。願て別る、日切の女夫寝いる間も惜いとて。顔と顔と突合せ頭もふらぬしたるさ。里歸りは扱置臺所へも出られませぬ。夫はぎやうな喰ひつき様をふして互ひにあらせたら。跡の爲めには珍重元信筆は達者なり。一日一夜に半年の仕事は出来ふと笑る。斯る所に無紋の色に淺黄の上下。緋笠取て入と見れば舞鶴屋の傳三郎。出口の與右衛門打しはれたる風情なり。名古屋と始め門弟中興さめて。是傳三あんまりうれは粹過た。聞ぬといふと有まい。葬禮の戻りに。祝言の家へ立ち寄るは無禮すぎたふだうけ。笑しうない歸れくと苦々しく叱られ。鼻打のみて目と擦りく。姫君様の御祝言と遠慮致して見ましたが。わきのら沙汰が有てはお恨みの程もいらいと。女房が心と付まして今日七日めの墓参り。ついでながらのおしらせ。常々氣だてが結構で。おみやとはいはず佛とやたに。あつたら佛とやきたいもない。こつほどけにしてのけたとさめくとぞ泣わたり。人より更に誠とせず酒に酔ふたの狂氣の。みやは少様子有つて姫君に換り四郎二郎と祝言し。五日前より奥に夫婦ならんでじや。阿呆と吐すまい。私と阿呆になさる

いの。七日前に死んだ人が五日前に来るもの。蓮臺寺専修様の御引導舟岡山で灰になじ和國様とはじめ女郎衆のら名代に。禿共が灰寄せ五輪迄立てたもの。なんの偽り申ませよと眞顔にいへば人とも。ぞつと怖氣も立寄りて。して眞實の途ふして死なれたとぞといへば。眞實のとはいとしばげに常が癡持ぶらくとはしなから。一日と寝られたともない人が。いつぞや葛城様身請の晩のら頭痛するとして引こんで。それら枕上らす次第に重つてくる程に。お客衆のひきくで柳原の法印さま半井の御典藥。幸と和國様へ對馬の客のら参つた朝鮮人參。尾張大根見る様なときさみもせず丸口。人參のよろふさと一期の見はじめ。人參でも鉄炮でもいゝな咽と通すにこそ。最ふ無いに極つて私と呼びよせ。今迄は隠した遠山といふた昔のら。四郎二郎様と夫婦の契約し。目出度ふ願ひ叶ふたら。女夫づれで熊野参りと致そよと。願ひとのけ此笠の紐も手づのら絆ました。これと着て四郎二郎様熊野へ参つて下され。死しても心は連れ立とふ書置もしたいが。口でさへ盡くされぬ筆には中々廻らぬ目とはつちりとあいて。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と七八へんは聞させし。た。なふ肝心の時には念佛といふ物も何んのこくに立ませぬ。南無阿彌陀佛へすうく陀佛

送やらすに。轉りとしていさましたと喚と叫べば人をも。扱は定よと手と打て皆袖とぞ絞らる。名古屋も呆れるられしが。疑ひもなく夫にひるる、魂魄假に形と見せけるぞや。さもあれ様子と尋ぬる爲め腰元衆くと呼びければ。あいと答へて奥より出る。なんとおみやは機嫌はよいのと問ひければ。機嫌よふにこく笑ふてござんする。去ながら志有りとして酒も魚も口へよせず。櫛の香の煙り絶やすな。煙絶めれば爰にゐるとならぬとて。おねまの内は抹香でふすばりますといひければ。して四郎二郎はどふしてぞ。そればおみや様の頼みで。お寝間の襖に熊野山の繪とあそばひてござんする。扱はみやの幽靈疑ふ所もないとあれば。腰元驚き、怖や。なふ知らひで傍に居ましたと。膝の傍に這ひ寄りて身と屈むこそ道理なれ。雅樂の介心と決せんと思ひ。さもあれ狸野干の業も有。誠の死したるまぼろしは形われ共。影映らずと承る。某参り直に逢ふて笠と渡し。灯火とたて實否と試し申べし。あたくは小庭より障子の影と御覽あれ。假令怪しいと有り共必わつといふまいぞ。何が恐いと有ると誰も口では夕暮や。小氣味のわるき籠が本軒に數蚊の餅つきも。其前垂の名残りと心細くも佇すり。雅樂の介何心なき關子にて。是は晴い

お座敷みや様はそれに。火と灯したらよふとござらふと云ふ聲す。なさればいな。心の迷ふた身の上間に闇と重ぬるつらさ。晴らして欲しやと夕顔の黄昏照らす行燈の。障子に映ると能く見れば元信は元の人体にて。女の影は五輪とみやが物とし斗人間の地水火風の風もろき。木の葉に結ぶ陽炎の露の姿を哀なる。四郎二郎はらうくと勞れ詫びたるごとくなり。雅樂の介雅訝しく。此菅笠は里の便に参りしが。何に入とぞと云へばなふ嬉しや。はんに是が欲つた私が熊野と信ずると。敦賀では遠山三國での名は勝山。伏見へ賣られて浅香山と云ふ字と三度つき。それ故に木つぢでは三山と付られし。思へば熊野三のお山の名と穢し。牛王の谷めも恐ろしくお主と一所にして下さらば。連れだちお禮に詣でませふと笠の紐造絆とさし。追付別る、身なれ共一日でも斯ふ添ふうらは。願は叶ふた同前神佛に嘘はないと。此襖戸にれ山の繪圖と頼みまし。参つた心で拜まんと思ふ所へこの笠は。どふした便に來たとぞ余のとは何もいはず。又の便に傳三殿へ假令いなると有り共。四郎二郎様へ歎きの憑るとなは。知らせまして下さんすなど。よふ言ひ届けてくださいと。苦の下まで我夫悼はる心を可憫なる。女夫連で参りませふ此方さまは

勝手へいて。後夜の鐘の鳴る迄念佛さらして下さんすな。似合たる知らぬと笠打被たる五輪の影。五ッの假の夢現余所のとではなくくも。元の座敷へ人は宗旨くの手向草。題目真言念佛の廻向に更るも

二熊野かげろふ姿

あら惜やあたら夜や。夫婦のなかに咲く花も。一夜の夢の眺めとは。知らぬ男の悼はしやど。泣くより外のとはなし。昔の朝の化粧に。髪にたいたり襟にとめ。そよとふくさの色風も今焼香に立つ煙り。反魂香と燻ゆるや香爐の灰の灰寄せも。順といふなら此方さんと。われこそあらめ逆さまの。水の流れの身のならひ。ところくの死水と。誰にとられん浅猿と。よろにいひなす言の葉と。世に亡き人とはるもしらず。いましくし。老木の末の思ひときはよしなやな。こちもそなたも若松の千代の盃ぎんぎ。濱松のとと。七はん松の七本と。女は卒塔婆に敷ふれど。男は今日の七五三。嫁入とせし戯れも今は誠と嬉しげに。手と引あふて笑ひ顔。我は朝顔。しばみゆく花のうへなる。露とはしらぬ果敢なまよ。月は缺けてもみつの山。娑婆の便りは片便宜。文も届かず言傳も。いはで心の船

野路や。照手の姫のやつれぐさ。常陸小はぎもかつと故。身と旅籠屋の水たなの。はしにめはなのうきあみと。夫どいさら白糸の。縁きたななきつら車。心の物に狂いぬと姿と物にくるのせて。ひげやく此車えいさらさらく笹の葉に。死出の旅路の後世の友。一ひきひけば千僧供養。二ひきひけば万能の薬のゆもと。聞のらに。四百四病の消へもせん。骨になつても愈らぬ。私がそ様と戀やまひ。變る心と案じての神の御名さへぞつととる。飛鳥の社濱の宮。王子く九十九所。百に成ても思ひなき世の和歌の浦。梢にのる藤代や。岩代峠汐見坂。書き寫と繪の残る共我の残らぬ身と聞ば。いとしやさころ我夫の。涙にくれて筆捨松の。甲の袖にみつしほの。新宮の宮居のうくと。出島によとる磯の浪。岸打つ波の普陀落や。那智の千手觀世音。古へ花山の法皇の。後の別れと戀ひ慕ひ。十善の御身ととて高野西國熊野へ三度。後生前生の宿願のけて。發心門に入る人の神やうくらん。御本社ほんしやの誠證殿まことあかしだんの階と。おりて下りて待うけ悦び給ふとのや。我のいの成罪業ざいごうの。其因縁そのいんごんの十二社と廻ぐる輪廻りんごと離れねば。疑ひ深き音無河。流れのつみどおけて見る。さうの秤はかりのおもりに。それさへ輕き盤石ばんせきの岩田川いわたがはにぞ着にける。垂跡すいじやく和光わくわうの方便

にや名所く宮立迄。顯れ動き見へければ元信信心肝に染み。我奮く筆共思われず目とふさぎ。南無日本第一大靈驗。三所權現と伏し拜み。頭とわけて目と開けば南無三寶。先に立たる我妻の眞逆様に天と踏み。兩手と運んで歩み行。はつと驚き是なふ淺ましき姿やな。誠や人の物語死したる人の熊野詣で。或ひの逆様後向生たる人への變ると聞く。立居に付て宵より心へのと有りしが。扱ひ和女の死んだらんと。盗し初めたる涙より盡きぬ歎きと成にけり。恥のしや心への陸地と歩むと思へ共。逆に見へけるのや四十九日が其中の。娑婆の縁に結とばはれ姿と見せて契りし物と。妹春の中に怖氣立ち愛想も盡さばいのせん。變る姿のつゝましや逢い見るとも是限りと。泣く聲斗身と絞る涙の霧や戀慕の霞。迷々朦々朦々として。見への隠れつ灯火の油煙に。紛れ失せにけり。元信五体とのつはと投げ。よし雨露に朽果てし骸骨なりとも抱き留め。肌身に添へん夫婦の友。何に恐氣の有るべきぞ。現世の逢瀬のなはずば。又死して此世と去り。極樂諸天のなるのとは假令へ地獄の底迄も。誘へ伴なへ連立てと。座敷のくまぐま屏風押退け。障子と開きやれ遠山の何方にぞ。みやのいづくに我妻戸。明る遺戸に遺手の形。現れ見へしを哀なる。

いつならのし世渡りや阿波の鳴門の超るとも。此浮舟の浮き流れ何と遺手の身ぞつらきまよの忍び路關となり文の通ひのさのも木に。人の思ひの戒しめながら。我身の包む戀衣赤前垂れの火焰に焦れ。三途八難の惡趣にだど。苦みの涙目と眩まし。生死と分ぬ迷ひの雲所々に名と變へて。あすく色と飾りし報ひ。身体一つが五つに分れ五輪五行の苦とくる。如何なる世への脱れんと。叫び慄く袂の影艶色あでなる二人の遊女。左右に別れ見へたるぞや。是こそ其はじめ白粉紅花に粧はひし。後世の道への遠山があだの情の釣針に。人々敦賀のうき姿松と言はれし松が枝の。四大のものと木に歸るなり。次の三國へのひ流されて姉女郎や傍輩に。賣り負けまいぞ勝山と名とのへ風と變へけるも。戀に我をはるがまん山。麓の塵のちりひぢの。土へのへそと御らんせと。夕月出るとくにて後には高くあらわれし。流れ漂よふ川竹の伏見に來ての淺香山。流石所も極樂と願へと告る撞木町。安養世界の夜見世への灯とべき灯火なく。吹消そ風も吹ずして一心の火とよとの火に。返そ間の影ぞのし。前に立たる花すゝきはのく見へしまぼろし。木辻の町の三つ山と呼れし時の面影が。今の名のみ奈良坂や。この手彼の手の枕の酒。みぞれあられと

へだつれど。解ればおなじのそり井の。水とりのなる願ふれも。ついに迷ひのせきにお
らみ。木の執心の斧にくたられ。土の逢ふ夜の壁とへだり。火の又三世の縁と焼く。四
六の四句と此身一つに重ね。重ねて空より出て空に入る。報ひも罪も色も情も迷ふも悟る
も待夜の鐘も。別れの鳥のこゑと返も。地水火風の五ツの玉の緒。只一筋に結びあひた
る姿成るぞや。なふく。惜みても猶惜まる。名残も縁もついでに行く。道ならばいさ伴
ないん。どの思へども夫の命ながれど。祈る心もさまざまに皆忘執のわた夢と。さめさ
めもろき涙の露の玉の臺の床の内。蓮理の遺片しきて永き契りと。待つぞや待たんしるし
これ。此一間卒塔婆永離三惡道。南無や三熊野本地の三尊。迎へ給へや導き給へと唱ふ
る聲の伏屋に残つて。形の見へず消へにけり。元信抱き留めんと絶りつけば影もなく。う
んと仰向に目くるめき忽然息切絶へ入りしと。名古屋揚屋門弟等驚き騒ぎ。薬さまざま呼
び助け。やうく一間に休めけり。夜もほのくくと明け行く頃官領の雜式不破の道犬長谷
部の雲谷誘引し。伴左衛門が酒漬の死骸と昇せとやくと亂れ入。此所に名古屋山三春平
や有る。官領よりの御下知有り對面せんと呼はつたり。名古屋通々せず出むへば。雜式

鉄鞭引鳴らし。不破、伴左衛門と手前が手につけしと紛なき上。父道犬願ひによつて。吟
味と透げらるゝ處盜賊の罪通れがたく。曲事に行なはるゝ條召捕り來れどの御錠。尋常に
繩とつゝられよとぞ仰ける。名古屋少しも騒がず懐中より。忘八の手形數通の文と取出し
斯様の愚蒙の返答は申も似合ぬとながら。片口の御裁斷如何にしてもあるくし。是れ此
手形とゆらんせ。葛城事は三月二日に親方が暇と取り。拙者が本妻借宅見たての間。揚屋
に預け置し所伴左衛門數通の錠書。斯くの通り不義者の妻敵なり。此方より願ひと申。親
道犬とも罪科に沈めんと存せし折ら。却つて我らと召捕れとは定てそれは各の聞違へ。
夫なる道犬の雲谷が事でがなごさらふ。遣げも走りもせぬ男。聞き直してお出なされよと
大様にころ答へけれ。道犬つゝと出汚ないくこりや山三。伴左衛門葛城と請出す手付
として。金子五百兩懐中せり。妻敵討は聞へたがなせ金子は盗んだ。惣じて盗みと云ふ物
も盗む時はうまいと。願れた時は辛い苦い物じやげな。なんとなんと脱るゝ所は有るまいと。
證據なき云ふながら名古屋も相手は死人なり。何と証の云譯と苦く敷を見へにける。
四郎二郎斯くと聞くより飛んで出。いやく兎角の評議は御無用。盗人ならば盗人切取な

らば切取。科人は狩野元信。繩は百筋千筋でもおのけなされと。大小脱いで投げ出さんと
する所と。名古屋押へて暫らく。御心底忝い去ながら。それ迄に及ぬとひらにくと
推留め。是道犬。某盗人でない譯が立ならば。とのれ又侍に盗人といひのけした其科は
なんとする。時に雲谷進み出イヤ山三。盗人でない云譯たてば。命と助ある其方が仕合よ。
道犬公は一子と殺され金子と取れ。何の過り有るべきと。いはせも果てずやうぬらが存す
る詮議にあらす。お屋形にては一ツ問へさへ入ざりしと忘れたる雲谷。此詮索相済んで己
奴も通がさぬ用心せよと。睨み付れば道犬。山三く脇道へそべらそまゐ。五百兩の金子
と身に付た伴左衛門。切りは切たが銀は去らぬと云ふとても言はせふ。盗人でないなら
ば云譯せよと詰める。言譯はして見せん其跡は合點。先云譯を聞かずと。せり
あへば雜式は名古屋。問答迄もなし其爲の我。人にこそよれ兩方共に弓馬の身がら。
盜賊といひのけ分明ならぬ訴訟。且は上と掠むる越度。云分たれば道犬は存分に計らふべ
し。又盜賊に極まらば下知の如く。お手前に繩をのけ申と理非明のに述べらる。名古屋
勇んで罷出名古屋山三春平は外の事は不調法。傾城の買ひ様と入切る様は大名人。恐らく

宗匠とさんなれ。それく伴左衛門が死骸と是へ出されよ。心得たりと役人共封切はささ
酒漬の。死骸は更に色變らず。只其時の如くなり名古屋袴のろば取てちのくと寄り。彼
と討しは先月廿日。曉月の時鳥名乗のけしん欺さぬ証據。向ふ疵に切り伏せとめと刺
んとこのつゝ。胸押し開けば懷中に金子有り。此徳置いては誠の盗人來つて搜し取らん
は必定。時には山三が盗みしと後日の難と察せし故。鳩尾ささと刺つて。金子は彼奴が身
体の内肺の臓に押込たり。五臓の中にも肺はね同氣もとめて朽もどろけもよも爲まじ。
いで見せんと手と伸しぐつと入れ。朱に染みたる鈍子の財布。引ずり出して是見たる。是
でも山三が盗人の。弓矢取る身の仕方と見よと道犬にはつたと投付。死骸と踏へつゝ立ば
雜式と始として。元信其外門弟等出來た。あつはれく御分別後學なりと勇みとなと
道犬は言句も出ず雲谷はひるまぬ貌。相手の言譯たつらは此方は切られぞん。お歸りな
されと立つ所と二人の雜式飛のり。鉄棒ふり上打つ程に面も眉間も打裂れ。胸骨碎くる
斗なり頓て繩をのけさせ。道犬親子は世間流布の重罪上と犯と科といひ。只今の始末諸人
の見せしめ。親子諸共獄門に墮さるべし。それく死骸の首とて。承つて下郎共搔首に

して髻たづなのらげ。道夫が首にのけさせ扱雲谷は常座の慮外。罪の軽重いゝあらんと有はれ共。元信春平詞とそろへ元は彼奴が惡逆。騒助の始なり古上の屋形に訴たへ。長袖なれば流罪に行なひ申たし。尤も二人共に牢屋へやれと引立れ共脛立す。身怯者歩まずば任せて桶にうち入れて。生ながらの酒びたし地獄の鬼の中じきさいと。戯れ笑ひ歸らるゝ悦ぶ中にも元信は。憂へに沈む那智の瀧亂るゝ色と勇めんと。謠へや謠へ雅樂の介其外の門弟中。憂ひは憂ひ祝義は祝義未來の嫁入は一七日。現世の嫁は七百町ながく知行にそみ筆や。家とさいしく繪具筆。く筆わら筆泥引筆。その筆先に金銀も。わきて和泉のつぼのゐん。ならびなつ毛の狩野の筆。末世の寶となりけり

下の巻

凡繪の道には六ツの法有り。長康張僧陸探の三人と。異朝の三祖と學びきて和國に筆の色とまど。狩野の四郎二郎元信天然彩墨の妙手と得て。後柏原後奈良の院正親町の帝。三代四代の聖朝に仕へ祝髪の後越前、法眼玉川齊永仙と號し。末世の今に至る迄。古法眼と賞歎するは此元信の筆とや。既に大永七年新帝。大嘗會悠基主基の御屏風と書き。從四位

下越前守に補任せられ。數多の門弟上下の供人肩といひらそ山科や。土佐、將監光信の山庄に案内せられける。將監夫婦出向ひ今官祿に秀で給ふと見るに付。娘が事のみ忘れがたなふ候と詞に先立つ涙なり。仰のごとく某とても彼の人と先立世に交る所存なけれ共。將監殿と世に立んと。惜のらぬ世も捨らぬ申せし所に。次第く登庸し大嘗會の御屏風と仕り叙爵に至る朝恩の上。貴公の勅勘訴訟叶ひ向後一家の結となし。相並んで繪所の門と開くべしとの宣旨と蒙ふり参りたり。親彦達と世にたてなば草葉の蔭の娘御の。一ツの迷ひも晴るべきのとのたのづくに禁中方。願ひ取なしひと語り給へば將監夫婦。有難や忝や歎きの中の悦びとは。我らが身にて候貴殿の御ひけいにて勅勘と免さるゝも。一ツは娘が光りぞとなとく落涙せさわへず。斯る所へ名古屋山三春平。樽肴黄金時服さまく音物持せ。將監に對面有り雲谷不破が不屈故。元信我等兩人永く沈繪致せし所。善惡の是非落居し。三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ。某も先知に復し候。其節は姫君の御事に付御じぶんさまく御懇志の趣。主人御屋形満足致され。先當分お禮申さるゝ印目錄の通。微少ながらと述べければ。御使がらと申御丁寧成る御事と。送の禮儀淺うらす暫く時こそ

移けれ。稍有て名古屋。承れば娘御遠山。忘八の手前約束の年明けて。今日はへ歸り候ふよし。さぞくお悦び推量致したと。いへ共人々のみこまれず兎角の返答なき所に。供の者共こゑくは。遠山様早やわれ迄見へます。迎ひにお出なされませありやく振つてござるはと。云ふても更に心得ず死して程経る遠山が。歸らん様は涙ながら立出見やれば屋形の姫君銀杏の前。懸いれずの二ツ櫓。鳴のはなりのはすは袖供の又平日柄傘。さしづめ香車は女房なり。いつ慣しの道中も心つければ振りやすい。ふれく雪の遠山が御影もよもや。是爰がかれが内のとつと入り。なふ父様母様今歸つたわいな。久しうて逢ひやしたと。とんと座りし居座居は禿だち見る如くなり。各は不審晴れず。名古屋は元より合點なれば。いづれもの御不審は尤。ながふ申せば段々われ共。必竟姫君と將監殿の娘にして。死したる人が二度蘇生られたと覺召し。元信にめわはせあれ姫君も一度は。大事の命と助けられし各なれば。斯ふなふてのら親同前。なまなの儀式だてしては養子といふで面白なさ。又平夫婦と談合して血とわけた遠山に。いたしたが我らが趣向取組は御屋形の。御意でござると小短く。譯も聞へる道もたつらぬつらふたるしるしなり。將監夫婦

も悦び涙。少さい時のお光が成人顔。見て嬉しいと抱き付てぞ泣給ふ。名古屋重ねて懐中より一通と取出し。是は田上郡七百町の御朱印。永代知行なされと頂戴させ。扱田上郡は給所くの入組にて地わり中よむづらし。某が父主計の介天文の曆筭に達し。鼠承露盤と云もの巧み。積物割物人の聲にしたがつて。承露盤の表明白に頭はる。是と以て勘へば間づもり知行高。刹那に相濟申べしと有ければ。元信聞給ひそれに付延喜の帝。陸平永寶駒引錢と鑄させて民と賑はし給ふ其駒は晋の韓幹が馬と寫されし。我又其駒の圖と傳へ覺へて候へば。駒引錢と鑄て領内と賑はし申へし。是は珍重然らば善は忙がしや。嫁入婿入國入して本祝言の儀式は重ねて。先々今宵は祝ふてさつと目出度ふそるべく。そらばんつふに。万代積るを豊なる。年は子の年大黒女夫。力次第に子孫も湧出る。地からは五穀手のらは金が湧出く子孫も遠。長久榮花の家繁昌は。君が恵みの威徳なり

傾城反魂香終

明治十四年四月十四日出版御届
明治廿四年四月十三日再版印刷
同年同月十四日出版

〔定價金七錢〕

發行 者 早 矢 仕 民 治
印刷 者 松 本 秋 齋
發兌 元 丸 善 書 店
全 武 藏 屋 叢 書 閣
神田區宮本町五番地
本郷區湯島壹丁目拾三番地
日本橋通三丁目
藏屋叢書閣
神田區宮本町五番地

賣 捌 書 肆

神田南神保町 松江堂
神田表神保町 黒雲堂
神田表神保町 上田屋支店
京橋彌左衛門町 東海堂
京橋尾張町 栗ばら堂
芝南佐久問町

神田區表神保町 中西屋
日本橋通一丁目 大倉書店
本郷區元富士町 文壽堂
本郷區四丁目 武藏屋
神田錦町一丁目 丸屋書店
横濱

京都 大坂 大坂 久保
大黒屋
便利 丸屋書店
九利 丸屋書店
博開分社
久榮堂

叢書閣出版目錄

神田區宮本町五番地

○故近松門左衛門作淨瑠璃本既刊書目

一出世景滯	貞享三年二月初興行	興行年月は樂曲類纂に依る	每冊定價七錢
一天智天皇	元祿二年三月初興行		郵税二錢
一十段	元祿三年三月初興行		
一百日會我	元祿十年十月初興行		
一源氏烏帽子折	元祿十二年正月初興行		
一蟬丸	元祿十四年五月初興行	○此符號は合卷	廿四年三月再版
一最明寺殿百人以上麗	元祿十六年三月初興行	◎此符號は合卷	廿三年十一月出版
一會根崎心中	元祿十六年五月初興行	□此符號は合卷	廿四年三月出版
一心中重井筒	寶永元年四月初興行	△此符號は合卷	廿四年二月三版
一傾城反魂香	寶永二年八月初興行		廿四年四月再版
一心中二枚繪双紙	寶永三年三月初興行		廿四年三月出版
一戀八卦柱曆	寶永三年九月初興行	◎	廿四年四月四版
一今宮の心中	寶永七年正月初興行		廿三年十一月出版
一吉野都女楠	正徳元年九月初興行		二十三年九月出版
一嫗山女姥	正徳二年七月初興行	△	二十四年二月三版
一國性爺合戰	正徳五年十二月初興行		二十四年一月出版
一日本振袖始	享保三年二月初興行		二十三年八月再版
一博多小女郎涙枕	享保三年十一月初興行	□	廿四年三月出版

一本朝三國志	享保四年二月初興行		二十四年三月三版
一雙生隅田川	享保五年八月初興行	*此符號は合卷	二十四年二月出版
一心中天の網鳥	享保五年十二月初興行	●此符號は合卷	二十四年三月出版
一心中宵庚申	享保七年四月初興行	*	二十四年二月出版
一關八洲繫馬	享保九年正月初興行		二十四年一月再版
一伊達染手綱	享保十七年六月初興行	○但し遺稿トアリ	二十四年三月再版

○諸名家戯曲傑作

一太平記	近松門左衛門添副 竹田出雲守松田和吉 合作	享保八年二月初興行	廿四年四月再版
一網目大塔宮曦鏡			
一心中ニッ腹帯	紀海音作	享保七年四月初興行	二十四年二月出版
一末廣十二段	紀海音作 合卷	元祿十五年五月初興行	二十四年二月出版

○浮世草子

一好色五人女	井原西鶴作	貞享三年開版	廿四年一月再版
一好色一代男	井原西鶴作	天和二年開版	廿四年四月再版
一傾城買二筋道	梅暮里谷職作	寛政十年開版	廿四年四月出版

每冊定價十二錢
郵税二錢

每冊定價八錢
郵税二錢

故井原西鶴作
再版 好色五人女

全五卷
合本一册

定價十二錢
郵稅二錢

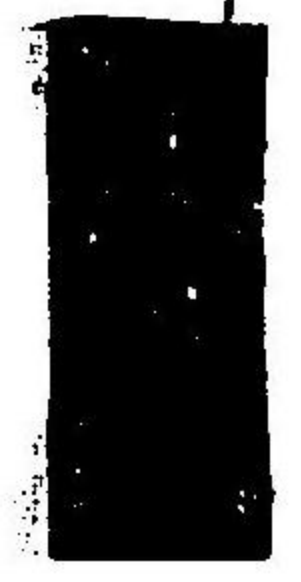
批評 「國會」 或る一部の小説家が六韜三略の巻はどに有難がる西鶴翁の好色五人女は西洋紙活版摺に衣裳を改めて明治の世に再生せり原本にあらざれば硝子と隔て、美人と物いひ交す心地すなど、云ふ人は兎もあれ未だ五人女に接せざる者は一たび之と読んで其氣前と知るも可なり

「國民之友」 好色風の小説やうやく盛んならんとす今や西鶴の好色本續々翻刻せられんとす、小説家または批評家の中に西鶴と讚美して措のざる者出で來れり、彼は實に此れの結果なりとす、西鶴の想像は卑近なり其文字は亂雜なり、其取るべき所は只活眼のみ、然るに今や人々妄りに彼と讚歎するに雷同せん、本書の出版人分疏して曰く、「社會は常あ人と作る」と、此語として眞箇の格言ならしめ、西鶴の今日に再生せる者豈亦故ならんや、豈また故ならんや

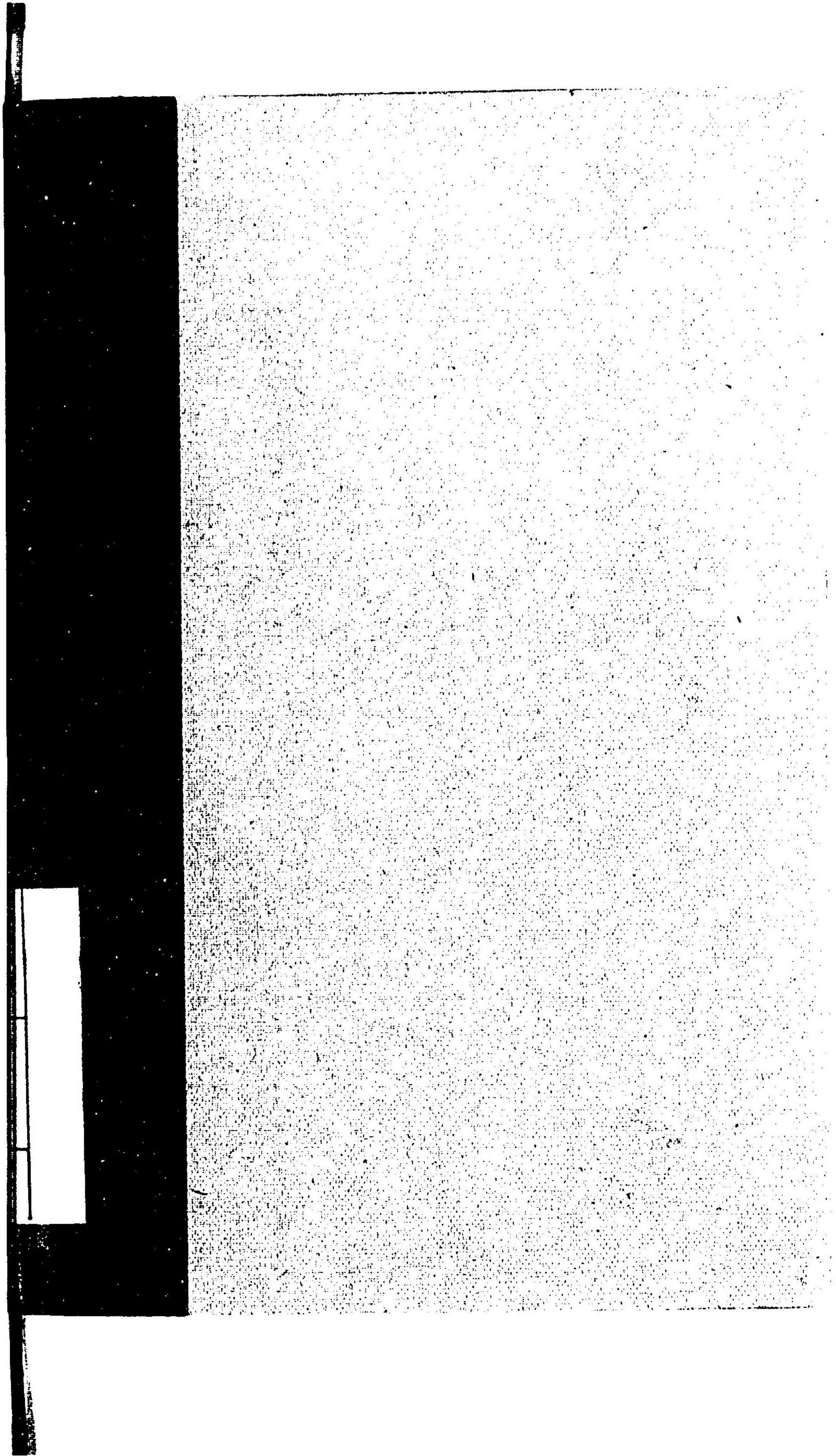
「東雲新聞」 井原西鶴の名久しく本函の底に埋もれて知る人もなきまでになり果しが近頃其の著ともて囃す者續々と現はれ明治の文學社會に此上なき名譽を得たるは西鶴の右に出るものなき程なり西鶴一代の著述數へ來ればなほ、多ある中に此著の如きは、その一代男、二代男、三代男、一代女、なんどと共に一世と警破したるものと聞ゆ原本猥褻の個所は翻刻者の注意もて之と削除し代ふに〇と以てしたるの注意至れりといふべし此書紙質と擇び活字も鮮明にて一部の正價十二錢なり

「東京新報」 近松門左工門の著作全書と出版したる武藏屋と丸善書店に於て今度發賣したる故西鶴の好色五人女は此節元祿文學の流行に連れ其價も騰貴して古本ならば一部二三圓上にも上るべき珍本と僅十二錢にて一般讀者に頒つものなり

7 K-23



2



傾城反魂香

国立国会図書館

912.4

Ti238k7

088220-000-9

912.4-Ti238k7

傾城反魂香

近松 門左衛門 / 著

M24

DBI-0043

